

y a m e
八女市内遺跡群 4

福岡県八女市新庄・国武・緒玉所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第107集

2015

八女市教育委員会

八女市文化財調査報告書 第107集

y a m e
八女市内遺跡群 4

福岡県八女市新庄・国武・緒玉所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第107集

2015

八女市教育委員会

序

八女市の西側に位置する新庄・国武・緒玉地区においては、以前より多くの遺跡の存在が知られており、土器や石器などが多数採取されています。現在においても遺跡や遺物が多数地下に存在しているものと思われ、これらの保存と周知は八女市が取り組まなければならない重要な課題となっています。

当該地区においては、昭和50年代後半から始まった八女南部地区県営圃場整備事業を発端とし、その事前調査のため発掘調査が実施され、これまであまり知られてこなかった古代の集落や墳墓が多数発見され、当地区の歴史の奥深さを認識するに足る成果が見いだされています。

今回の報告は、昭和63年から平成元年に行われた発掘調査の概要報告内容について再検討を行い、より精度の高い情報を公表する事で2000年程前の先人の暮らしぶりを知って頂き、今現在においても地下に埋蔵している遺跡に対し、深いご理解と文化財愛護の思いを持って頂く事を目的としております。

この報告書が今回公表させて頂きました遺跡のみならず、市内に数多く点在する文化遺産を深く理解する一助となり、今まで以上の郷土愛の心を育むことに寄与出来るのであるならば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡の発掘調査に格段のご理解を頂きました関係各位、及び、地元の皆様方には並々ならぬご協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げるとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成27年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は、八女市新庄字井手口、国武字中里、緒玉袴田所在遺跡における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査で検出した遺構の名称・番号については、昭和63年～平成元年の調査時に準じて付しているが、重複等の混乱も見られる事から新番号を付したものもある。
- 4 本書に使用した現地測量図については、昭和63年～平成元年に実施された発掘調査当時の担当責任者を中心として参加者で分担して行っている。
出土遺物の実測図作成については岩戸山歴史資料館において一部を除き実施されている。
- 5 本書に使用した現地写真は、発掘調査当時の担当責任者が撮影している。出土遺物の撮影については岩戸山歴史資料館において本報告における整理担当者が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北を基準としている。
- 7 本書の執筆、及び、編集については大塚が行った。この折、平成元年に刊行されている埋蔵文化財調査概報（八女市文化財調査報告書 第18・19集）を参考とした。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1 調査の経過

A 調査に至る経過

B 調査体制

2 遺跡の立地と歴史的環境

3 調査の内容

発掘調査の概要

井手口遺跡

1) 遺構と出土遺物

中里遺跡3地点

1) 遺構と出土遺物

袴田遺跡

1) 遺構と出土遺物

出土遺物観察表

図版 (PLATES)

挿 図 目 次

第 1 図 周辺の遺跡分布図 [1/2,500]

井手口遺跡

- 第 2 図 井手口遺跡 位置図 [1/2,500]
- 第 3 図 井手口遺跡 遺構配置図 [1/300]
- 第 4 図 SB-01 実測図 [1/80]
- 第 5 図 SD-01・02 土層断面実測図 [1/40]
- 第 6 図 SD-06 土層断面実測図 [1/40]
- 第 7 図 SD-05・07 土層断面実測図 [1/40]
- 第 8 図 SD-07 土層断面実測図 [1/40]
- 第 9 図 SD-10 土層断面実測図 [1/40]
- 第 10 図 SD-13 土層断面実測図 [1/40]
- 第 11 図 SD-17 中央土層断面 実測図 [1/40]
- 第 12 図 SD-17 南土層断面実測図 [1/40]

中里遺跡3地点

- 第 13 図 SB-01 実測図 [1/80]
- 第 14 図 中里遺跡3地点 位置図 [1/2,500]
- 第 15 図 中里遺跡3地点 遺構配置図 [1/200]
- 第 16 図 SB-02 実測図 [1/80]
- 第 17 図 SB-03 実測図 [1/80]
- 第 18 図 SB-04 実測図 [1/80]
- 第 19 図 SB-05 実測図 [1/80]
- 第 20 図 SB-06 実測図 [1/80]
- 第 21 図 SB-07 実測図 [1/80]
- 第 22 図 SK-01 実測図 [1/40]
- 第 23 図 SK-02 実測図 [1/40]
- 第 24 図 SK-03 実測図 [1/40]
- 第 25 図 SK-04 実測図 [1/40]
- 第 26 図 SK-05 実測図 [1/40]
- 第 27 図 SK-06 実測図 [1/40]
- 第 28 図 SK-08 実測図 [1/40]
- 第 29 図 SK-09 実測図 [1/40]
- 第 30 図 SK-10 実測図 [1/40]
- 第 31 図 SK-11・18 実測図 [1/40]
- 第 32 図 SK-17 実測図 [1/40]

袴田遺跡

第 33 図	SB-01・02	実測図	[1/80]
第 34 図	袴田遺跡	位置図	[1/2,500]
第 35 図	袴田遺跡	遺構配置図	[1/250]
第 36 図	SB-03	カマド実測図	[1/40]
第 37 図	SB-03	実測図	[1/80]
第 38 図	SB-04	実測図	[1/80]
第 39 図	SB-05	実測図	[1/80]
第 40 図	SB-06	実測図	[1/80]
第 41 図	SB-07・08	実測図	[1/80]
第 42 図	SB-09	実測図	[1/80]
第 43 図	SB-10	実測図	[1/80]
第 44 図	SB-11	実測図	[1/80]
第 45 図	SB-11	カマド実測図	[1/40]
第 46 図	SB-12	実測図	[1/80]
第 47 図	SB-13	実測図	[1/80]
第 48 図	SB-14	実測図	[1/80]
第 49 図	SB-15	実測図	[1/80]
第 50 図	SB-16	実測図	[1/80]
第 51 図	SB-17	実測図	[1/80]
第 52 図	SB-18	実測図	[1/80]
第 53 図	SB-19	実測図	[1/80]
第 54 図	SB-20	実測図	[1/80]
第 55 図	SK-01	実測図	[1/40]
第 56 図	SK-02	実測図	[1/40]
第 57 図	SK-04	実測図	[1/40]
第 58 図	SK-05	実測図	[1/40]
第 59 図	SK-06	実測図	[1/40]
第 60 図	SK-07	土層断面実測図	[1/40]
第 61 図	SK-08	実測図	[1/40]
第 62 図	SK-09	土層断面実測図	[1/40]
第 63 図	SK-10	実測図	[1/40]
第 64 図	SK-11	実測図	[1/40]
第 65 図	SK-12	実測図	[1/40]
第 66 図	SK-13	実測図	[1/40]
第 67 図	SK-14	実測図	[1/40]
第 68 図	SK-16	実測図	[1/40]
第 69 図	SD-01	土層断面実測図	[1/40]
第 70 図	SD-02	土層断面実測図	[1/40]
第 71 図	SD-06	土層断面実測図	[1/40]

第 72 図 SX-01 実測図 [1/80]

出土遺物

第 73 図 中里遺跡3地点 出土遺物実測図 [1/4]

第 74 図 袴田遺跡 SB-01(13・14)、SB-02(15・16)、SB-03(17)
SB-04(18～32)、SB-05(33～37) 出土遺物実測図 [1/4]

第 75 図 袴田遺跡 SB-05 出土遺物実測図 [1/4]

第 76 図 袴田遺跡 SB-05(54～60)、SB-07(61～63)、SB-08(64・65)、SB-09(66)
SB-10(67・68)、SB-11(69・70)、SB-12(71)、SB-13(72)
出土遺物実測図 [1/4]

第 77 図 袴田遺跡 SB-19(79～85)、SK-07(86～89)、SB-11(90・91)
SK-12(92～102)、SK-13(103～105)、SD-01(106) 出土遺物実測図 [1/4]

第 78 図 井手口遺跡 SD-05(107)、SD-07(108)、SD-16(109)、SD-17(110～112)
出土遺物実測図 [1/3]

表 目 次

第 1 表 出土遺物観察表

図 版 目 次

PL 1～PL 10 現地遺構写真

PL 11～PL 14 出土遺物写真

1 調査の経過

A 調査に至る経過

昭和57年度を初年度として八女南部地区において実施された県営圃場整備事業は、一級河川である矢部川から山ノ井川までの地域約209haを整備するために計画された事業である。初年度以降においては順次北方地域に向け、毎年20ha程度の事業が実施された。

昭和63年には新庄地区、平成元年には国武・緒玉地区が事業地となり、八女市教育委員会が現地における遺跡の分布状況を調査したところ、一部に埋蔵文化財の包蔵が推測された。これを受け、八女市教育委員会と八女南部土地改良区が協議を行い、地下に埋蔵される遺跡の広がりを調べるため試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居・掘立柱建物や多数の土壙や溝状遺構が発見され、遺跡全体の広がりは相当な範囲に及ぶ事が推測された。試掘調査の結果を踏まえ、八女市教育委員会では国庫補助事業として発掘調査を実施する事となり、井手口遺跡においては昭和63年7月11日より、中里遺跡3地点においては平成元年6月15日より、袴田遺跡においては平成元年8月23日より発掘調査（本調査）を開始した。

以後、後年において圃場整備事業実施予定地となった地区においては事業前年度に試掘調査を実施し、事業地内の埋蔵文化財の在り方について把握を行い、関係各機関と協議を行いながら連携を重ね、圃場整備により削平・掘削が実施される部分を中心に発掘調査を実施している。整備事業において削平を免れた地域については、遺跡保護の観点から現状保存の策が採られている。

B 調査体制

【昭和63年度】（現地調査時）

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	坂田 不二夫
社会教育課長	平島 敏章
同 課長補佐	杉山 信行
同 係員	梅野 満、平田 高義、平嶋 芳子、赤崎 敏男
同 嘱託	鹿田 昌宏（調査担当）

【平成元年度】（現地調査時）

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	坂田 不二夫
社会教育課長	平島 敏章
同 課長補佐	山下 節夫

同	係長	大月 重信
同	係員	梅野 満、平田 高義、平島 芳子、赤崎 敏男（調査担当）
同	嘱託	鹿田 昌宏

【平成26年度】（本報告刊行時）

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生
教育部長	永松 二美
文化課長	井上 秀樹
同 課長補佐	月足 稔
同 参事補佐	北島 一雄
同 文化財係長	大塚 恵治（総括・本報告担当）
同 係員	永田 寧（別冊報告担当）
同 係員	檀 佳克（別冊報告担当）
同 係員	渡部 真弓

2 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苧の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647㎡を誇る福岡県下第3の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

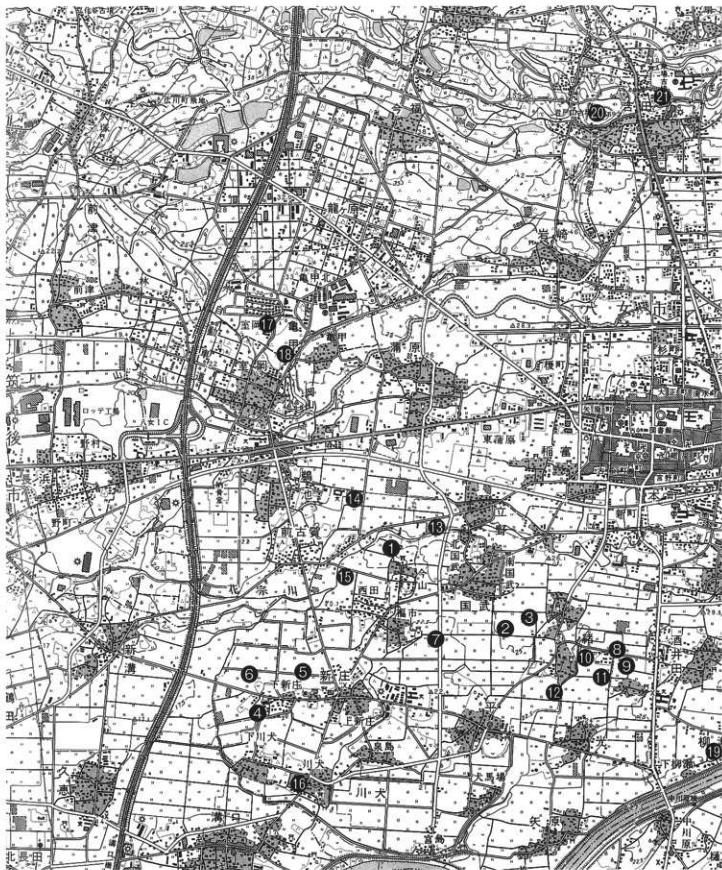
井手口遺跡、中里遺跡3地点、袴田遺跡は福岡県八女市新庄、国武、緒玉に所在している。

当該地周辺は弥生時代から古墳時代、歴史時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られ、大規模な圃場整備事業の実施に伴い弥生時代中期に属する大規模な集落や墳墓群の発見があった。また、同時に中世の遺跡群も発見され、当地区における埋蔵文化財の概要が明らかになってきた。以下、八女市西部における概要を記し、当遺跡を理解する一助とした。

（概要）

八女西部地区における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡る事が出来、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型文土器が数多く出土している。同後期に入ると、南西部のアモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓が見られるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しが見られるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。立野・大坪遺跡や宿町遺跡は直径100m前後の貯蔵穴専用環濠と思われるのに対し、亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容は捉えられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になる事が多く、これら遺跡の出現期には既に稲作が導入、または、定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴式住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のように大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになっ



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|------------|
| 1. 井手口遺跡 | 6. ヒヤケ遺跡 | 11. 二反田遺跡 | 16. 川犬古墳群 |
| 2. 中里遺跡3地点 | 7. 中里遺跡1・2地点 | 12. 宿町遺跡 | 17. 西山ノ上遺跡 |
| 3. 袴田遺跡 | 8. 深田遺跡 | 13. 立野・大坪遺跡 | 18. 亀ノ甲遺跡 |
| 4. 新庄・六反田遺跡 | 9. 京田遺跡 | 14. 橘の口遺跡 | 19. アモメ遺跡 |
| 5. 宮ノ后遺跡 | 10. 野田遺跡 | 15. 川原遺跡 | 20. 岩戸山古墳 |
| | | | 21. 乗場古墳 |

第1図 周辺の遺跡分布図 [1/25,000]

て出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取出来る。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭と共に、大規模集落同士の統合が進んでいる事を連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡が見せるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向が見られる。原因は定かでないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半頃から5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（107m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳群から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長約47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀等にある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし、7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。

これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎える事となる。

3 調査の内容

発掘調査の概要

今回報告を行う井手口遺跡、中里遺跡3地点、袴田遺跡の3遺跡は八女南部地区園場整備事業に伴う事前発掘調査により発見された遺跡で、基本的には当該地における小字名がその名の由来となっている。

井手口遺跡は事業地西側の新庄地区北側に位置し、中里遺跡は国武地区の中央付近に、袴田遺跡は緒玉地区中央、国武地区との境付近に位置している。

井手口遺跡については、遺跡検出の段階で多数の溝状遺構と竪穴住居1棟のみが存在している事が判明し、集落主体部の外縁部に位置している事が容易に推測出来る。

中里遺跡3地点については、掘立柱建物群や数条の溝状遺構、数基の土壌が見られる。中でもSB-02は片面庇を有する大型の建物であり、東西方向に方位をとり道路状遺構の可能性もあるSD-01・03・04との関係性が考えられる。

袴田遺跡については、竪穴住居・掘立柱建物群に加え、土壌や溝状遺構が検出されており、比較的まとまった一般集落と考えられる。大きく古代と歴史時代の産物に分けられるが、集落の規模は概して後者が大きい。特に掘立柱建物群の同一的な方向性は注目すべきであり、当時の一般集落中においてもやや特殊な事例の一つとして捉えられる。

以下においては、各遺跡における調査結果について報告を行う。

井手口遺跡

遺跡の概要

奈良時代から平安時代までの遺構が検出されているが、中心となるものは平安時代の溝状遺構群である。当該遺跡で唯一の竪穴住居は溝状遺構に切られている。遺構検出時における溝状遺構のナンバリングでは遺構は17条に分けられているが、実際の溝としては9条を数えるものと思われる。

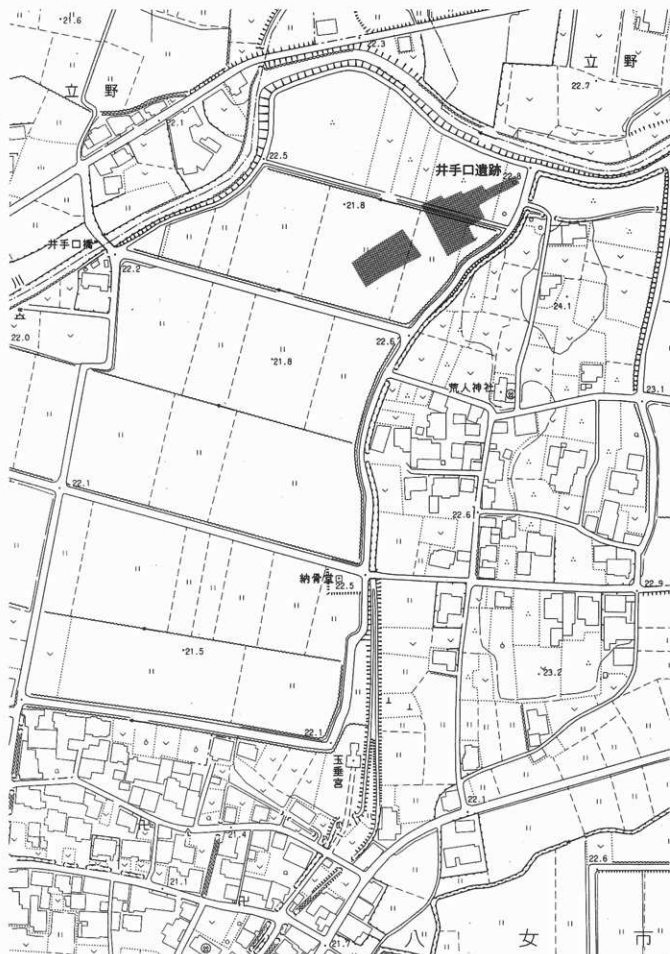
以下、各遺構・出土遺物の詳細について記述する。

1) 遺構と出土遺物

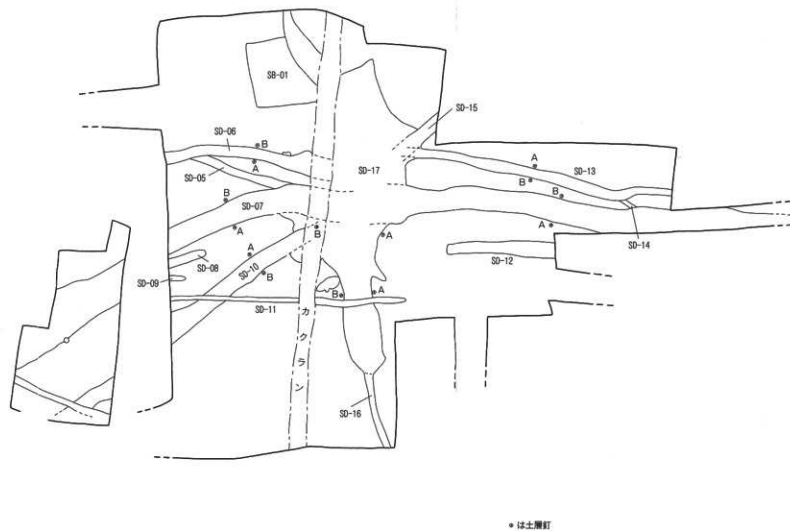
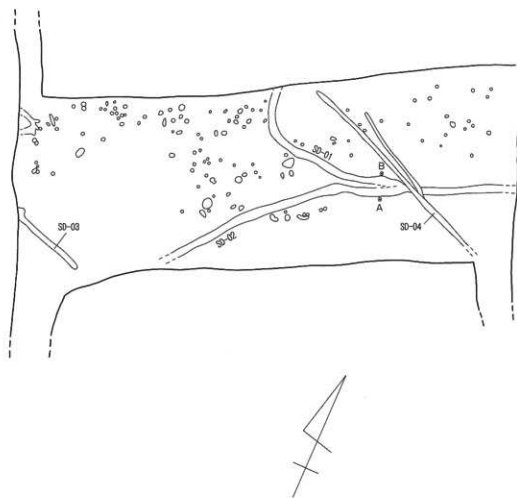
竪穴住居 (SB)

SB-01 〈第4図〉

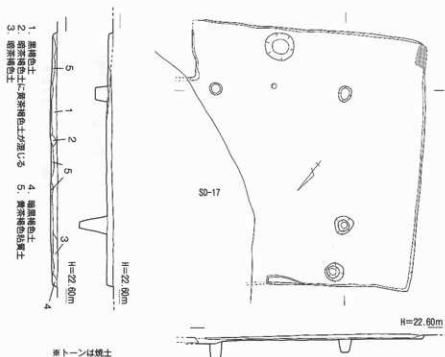
2地点の北端において検出した平面プランが正方形を呈すると考えられる竪穴住居である。長軸方位をN-35°-Wに取り、規模は長軸長5.5m、短軸長5.0m、深さ0.1mを測る。主柱穴と考えられるピットは3つあり、4本柱の建物であったと思われる。南辺中央に位置するピットは屋内土壌と思われる。削平が著しく、出土遺物が殆ど認められなかった。



第 2 図 井手口遺跡 位置図 (1/2,500)



第 3 図 井手口遺跡 遺構配置図 [1/300]



第 4 図 SB-01 実測図 [1/80]

溝状遺構 (SD)

SD-01 <第 3・5 図>

1 地点の中央で検出した溝状遺構で、北～南方向の流路を持つものと推測される。調査区中央東寄りでは SD-02 と一体化し東流すると思われる。規模は現状で検出長 14.0m + α、幅 0.6m、深さ 0.4～0.5m を測る。

SD-02 <第 3・5 図>

1 地点の中央で検出した溝状遺構で、南西～東方向の流路を持つ。規模は 1 地点内の現状で検出長 27.8m、幅 0.6m、深さ 0.4m を測る。調査区中央東寄りでは SD-01 と一体化し東流する。

SD-03 <第 3 図>

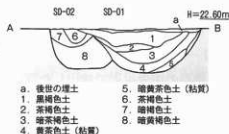
1 地点の西端で検出した溝状遺構。流路方向不明。規模は現状で検出長 6.2m、幅 0.4m、深さ 0.12～0.2m を測る。

SD-04 <第 3 図>

1 地点の東寄りでは検出した溝状遺構。流路方向不明。規模は現状で検出長 17.4m、幅 0.3～0.4m、深さ 0.1m を測る。SD-01・02 を切る。2 本の溝が交わり 1 本化するの SD-01・02 と同じだが、他の溝状遺構とは方向性が異なることが気がかりである。

SD-05 <第 3・7 図>

2 地点の中央付近で検出した溝状遺構で、西～東方向の流路を持つ。SD-06 との関係は不明であるが、SD-07 を切ったまま同一流路にて東流する。規模は現状で検出長 38.6m、幅 0.65m、深さ 0.39m



第 5 図 SD-01・02
土層断面実測図 [1/40]

～1.08mを測る。SD-06との位置関係やSD-07との前後関係から、SD-07が水路として機能しなくなったのち、その対応策としてSD-06から水流を引き込んだものと思われる。

SD-06 <第3・6図>

2地点の中央西寄りで検出した溝状遺構。西から東に向かい若干底面レベルを下げる。遺構のナンバリングでは別遺構となっているが、流路の方向性や底面レベルの相似性からSD-13と同一溝であると思われる。規模は現状で検出長12.0m、幅0.95m、深さ0.35m～0.48mを測る。SD-13と一体的に考えた場合の検出長は39.8mを測る。

SD-07 <第3・7・8図>

2地点の中央で検出した溝状遺構。西から東に向かい若干底面レベルを下げる。SD-05に切られる。規模は現状で検出長54.8m、幅1.8m、深さ0.76m～1.08mを測る。

溝内から小田編年Ⅳ期の須恵器が出土しており、7世紀前半頃の遺構と考えられる。

SD-08 <第3図>

1地点の西端で検出した溝状遺構。流路方向不明。検出部分が僅かであり詳細は不明と言わざるを得ないが、規模は現状で検出長2.8m、幅0.65m、深さ0.1mを測る。

SD-09 <第3図>

1地点の西端で検出した溝状遺構。流路方向不明。SD-08同様検出部分が僅かであり、詳細は不明と言わざるを得ないが、規模は現状で検出長1.0m、幅0.25m、深さ0.04mを測る。

SD-10 <第3・9図>

2地点の中央付近で検出した溝状遺構。北東から南西に向かい底面レベルを下げる。遺構のナンバリングでは別遺構となっているが、流路の方向性や底面レベルの相似性からSD-15と同一溝であると思われる。規模は現状で検出長13.2m、幅1.2m、深さ0.68m～0.83mを測る。SD-15と一体的に考えた場合の検出長は27.8mを測る。

SD-11 <第3図>

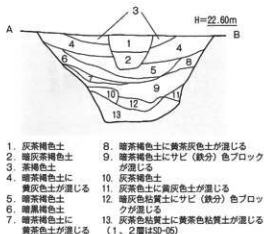
2地点の中央やや南寄りで検出した溝状遺構。SD-10、及び、SD-17を切っている。他の溝状遺構とは異なり、直線的な遺構となっている。規模は現状で検出長18.7m、幅0.25m～0.5m、深さ0.05mを測る。

SD-12 <第3図>

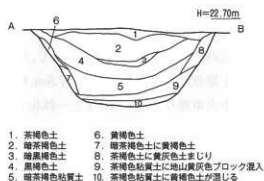
2地点の中央やや東寄りで検出した溝状遺構。東側延長部は調査区外に出ており、詳細は不明。規模は現状で検出長8.3m、幅0.8m～1.1m、深さ0.13m～0.3mを測る。僅かに西から東に向かい底面レベルを減じており、西～東方向の流路を持つものと思われる。



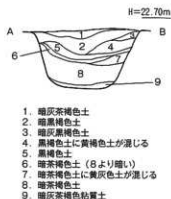
第6図 SD-06
土層断面実測図 (1/40)



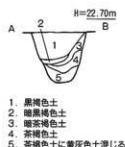
第7図 SD-05・07
土層断面実測図 (1/40)



第8図 SD-07
土層断面実測図 (1/40)



第 9 図 SD-10
土層断面実測図 [1/40]



第 10 図 SD-13
土層断面実測図 [1/40]

SD-13 <第3・10図>

2地点の東端で検出した溝状遺構。規模は現状で検出長 22.2m、幅 0.55m～0.9m、深さ 0.52m～0.6m を測る。SD-06 の項において記述したとおり、規模や流路方向等を考え同一遺構であると判断した。

SD-14 <第3図>

2地点の東端で検出した溝状遺構。SD-07 と SD-13 を接続するような形で遺存している。規模は現状で検出長 1.2m、幅 0.5m、深さ 0.35m を測る。調査区東端部における SD-13 と SD-07 の形状は非常に類似しており、恐らく同時併存関係にあったものと思われる。遺構の規模や西→東方向が推定される水流方向から、SD-07 が水量不足に陥った際、仮の措置として水路を付設した可能性が考えられる。

SD-15 <第3図>

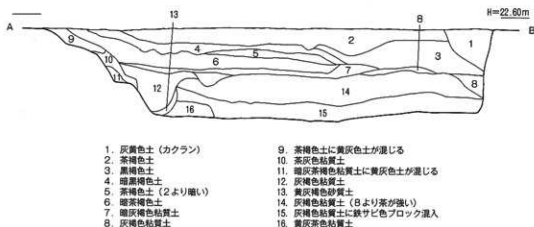
2地点の北東側で検出した溝状遺構。規模は現状で検出長 3.3m、幅 0.9m、深さ 0.59m～0.66m を測る。SD-10 の項において記述したとおり、規模や流路方向等を考え同一遺構であると判断した。

SD-16 <第3図>

2地点の南端で検出した溝状遺構。北から南に向かい若干底面レベルを下げる。SD-17 との切り合い関係については不明。規模は現状で検出長 6.0m、幅 0.5m、深さ 0.08m～0.3m を測る。

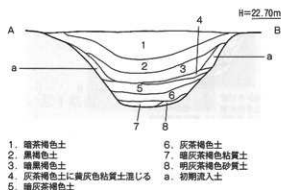
SD-17 <第3・11・12図>

2地点の中央で検出した溝状遺構。流路方向不明。溝状とする事に躊躇せざるを得ないほど平面形状が定まらず、また、北側には 2カ所の島状のフラット部分もあり、水流等により自然



第 11 図 SD-17 中央土層断面 実測図 [1/40]

に挟まれた若干の水流を伴う溜池状の遺構であった可能性が高い。本遺構以外の溝状遺構との时期的な関係性は明確には出来ないが、前述の推定が正しければSD-05、08、09、11、12を除いた各遺構は、ほぼ同時期に存在しており、本遺構は源流から引いた水を一時的に貯め水温を上げて水田に水を送るための貯留池であった可能性も想定出来る。



第12図 SD-17
南土層断面実測図 [1/40]

小 結

ここまで井手口遺跡検出の遺構について概観してきたが、ここで当該遺跡の特徴について記述したい。検出された遺構の大半は溝状遺構であり、直接生活に関わる遺構は2地点北端のSB-01のみであった。また、1地点において複数のピットが検出されているものの、直接建物と直結するようなものは確認出来ず、本地点が当該時期における集落の縁辺部（最端部と言うべきか）に位置している事は明らかである。

しかしながら、各溝状遺構について観察するとSD-07の規模が他と比較し際立っている点や、本溝を中心とした他溝の造営状況が垣間見えてくる。

その顕著な例がSD-05とSD-14であるが、状況的に見てSD-07の流水が枯涸、または、流量が著しく減少した折にバイパスを設け、本流たるSD-07に水を流し込む工夫をこらしてみたり、埋没途中に同じ流路方向を有する別溝を埋没土を掘削して設置するなど、多くの溝がSD-07の機能に深く関わっている。また、前述したようにSD-17は形状や他溝との連結の仕方から溜池状の機能を併せ持った溝状遺構であると推定している。

このような状況から、当該遺跡において検出した溝状遺構、特にSD-07においては水田耕作に深く関わりのある溝であったと判断出来る。集落維持のために必要不可欠な農業用水路であったのではないだろうか。

現状では井手口遺跡を営んだ集落母体がどの位置にあったのかを推定する事は困難であるが、SB-01の配置状況や各溝の流路方向などから、集落の中心域は北西方向にあり、その生活面を支えた水田は当該遺跡の東方にあったものと考えられないだろうか。

本推定が、今後当地域周辺の歴史解明に役立つ事を願って止まない。

中里遺跡3地点

遺跡の概要

奈良時代全般から平安時代初頭までの遺構が検出されているが、中心となるものは奈良時代中頃に比定される掘立柱建物群である。計7棟を検出したこれら建物群は規模や建物の方位により大きくA～C期の3時期に分ける事が可能であると思われる。

A期は7世紀中頃を中心とした時期で、SB-05・06がこれに該当する。ほぼ同規模で並列し総柱建物という構造的な共通点があることからのグルーピングである。

B期はSB-02・03が該当し、当該遺跡において建物規模が最大化する時期である。建物群の北側を東西方向に走るSD-01・03・04は本時期に掘削されたものと推測される。8世紀前半から中頃を中心とした時期が考えられる。

C期はSB-01・04が該当する。これは各建物群との位置関係、及び、軸方位をほぼ同一に持ち北辺側の柱列がほぼ一直線に並ぶ共通点からのグルーピングである。遺構の切り合い関係から8世紀後半以降と考えられる。

建物群の周囲には多数の小穴が存在しており、掘立柱建物以外の構造物の存在を示唆しているが、上屋構造物と考えられる柱列配置は見出す事は出来なかった。

以下、各遺構・出土遺物の詳細について記述する。

1) 遺構と出土遺物

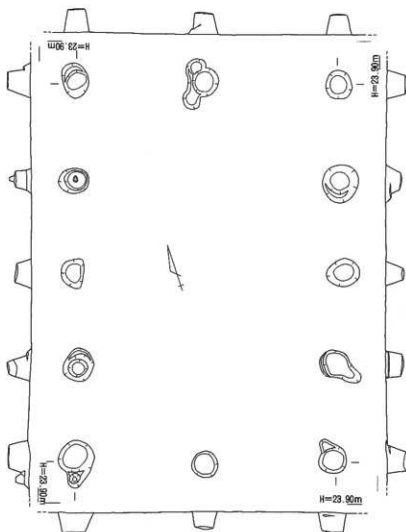
掘立柱建物 (SB)

1号掘立柱建物〈第13図〉

建物群の南西において検出した12本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-20°-Eに取る2間×4間の側柱建物である。規模は8.0m×5.5m、床面積44.0㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成している。一部柱穴には底面に柱圧痕が残っているが、基本的に重量物の集荷は成されていないと思われる。

2号掘立柱建物〈第16図〉

建物群の中央部において検出した14本柱の掘立柱建物である。北辺に1面庇を有しており、当該



第13図 SB-01 実測図 (1/80)



第14図 中里遺跡3地点 位置図 [1/2,500]

遺跡中では最大規模の建物である。主軸方位をN-17°-Eに取る3間×4間の側柱建物である。規模は8.0m×7.7m、床面積61.6㎡を測る。底部分を含む主軸長は9.5mとなる。柱穴掘方プランは長円形と円形であるが、一部にやや不整形なものも含まれる。底部分のプランは円形を成す。底面には柱圧痕が残っておらず、全体的にやや浅めの柱穴を成している。重量物の搬入には不向きと思われ、軽荷物搬入用の小屋、もしくは、簡易な床面を有する建物であった可能性が考えられる。

3号掘立柱建物

〈第17図〉

建物群の南西において検出した7本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-14°

-Eに取る2間×3間の側柱建物である。規模は7.7m×5.5m、床面積42.35㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成している。柱圧痕は認められない。

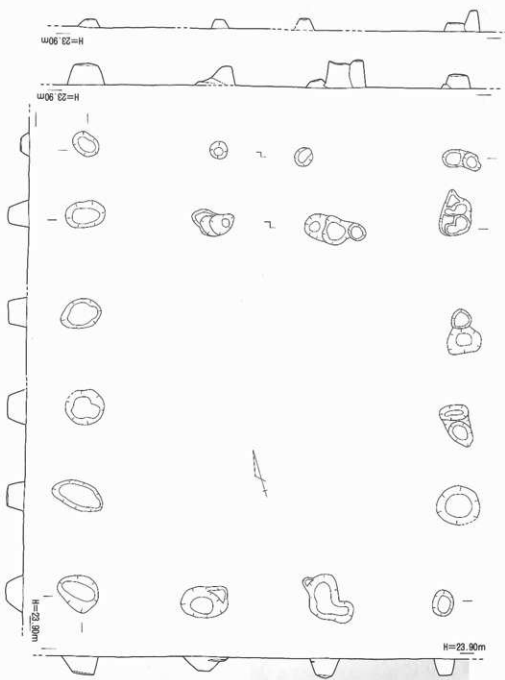
南西側の側柱が1本欠落しているところから、当該箇所を出入り口とした平地式の建物と考えたい。

4号掘立柱建物〈第18図〉

建物群の南東において検出した12本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-19°-Eに取る3間×3間の側柱建物である。規模は6.3m×6.0m、床面積37.8㎡を測る。柱穴掘方プランは小円形を成している。柱圧痕は認められない。

5号掘立柱建物〈第19図〉

建物群の北東において検出した9本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-10°-Eに取る2間×2間の総柱建物である。規模は4.0m×3.8m、床面積15.2㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成



第16図 SB-02 実測図 [1/80]

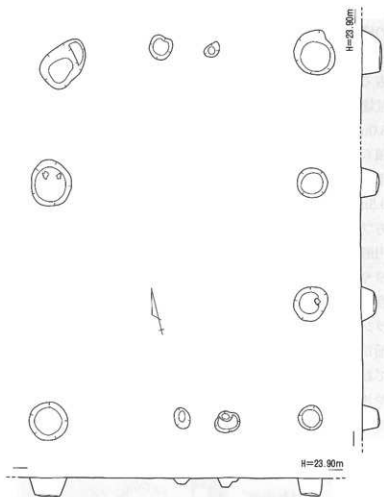
すが、一部に不整形なものを含む。柱圧痕は認められない。SD-05の一部を切り込む。

6号掘立柱建物〈第20図〉

建物群の北西において検出した9本柱と考えられる掘立柱建物である。主軸方位を $N-12^{\circ}-E$ に取る2間×2間の総柱建物である。規模は $3.8m \times 3.25m$ 、床面積 $12.35 m^2$ を測る。柱穴掘方プランは基本的に小円形を成すが、一部の柱穴に建て替えと思われる重複が見られる。柱圧痕は認められない。SD-05の一部を切り込んでいるものと思われる。

7号掘立柱建物〈第21図〉

建物群の中央部において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-12^{\circ}-E$ に取る1間×2間の側柱建物である。規模は $2.8m \times 2.0m$ 、床面積 $5.6 m^2$ を測る。SB-01~06とは規模も構造も異なることから、時期の大幅に異なる建物と考えられる。構造的には弥生時代の掘立柱建物に類似するが、出土遺物等なく、時期比定は困難である。柱穴掘方プランは楕円や方形を成している。柱圧痕は認められない。



第17図 SB-03 実測図 [1/80]

土壇 (SK)

SK-01 〈第22図〉

調査区の北西部において検出した平面プランが楕円形を呈する土壇である。長軸方位を $N-84^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.05m \times 0.64m$ 、深さ $0.3m$ を測る。

SK-02 〈第23図〉

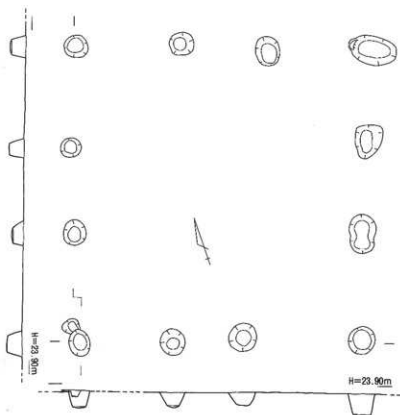
調査区の北東部において検出した平面プランが不整楕円形を呈する土壇である。長軸方位を $N-17^{\circ}-E$ に取る。規模は $2.25m \times 1.05m$ 、深さ $0.7m$ を測る。2段掘りになる断面形状から、弥生時代中～後期の土壇墓の可能性もある。副葬品等の出土遺物はなかった。

SK-03 〈第24図〉

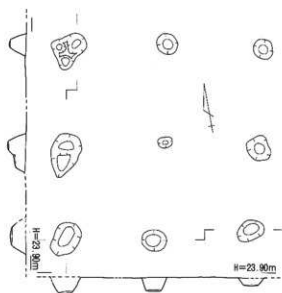
調査区の中央において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壇である。長軸方位を $N-37^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.1m \times 0.62m$ 、深さ $0.28m$ を測る。SD-02を切る。

SK-04 〈第25図〉

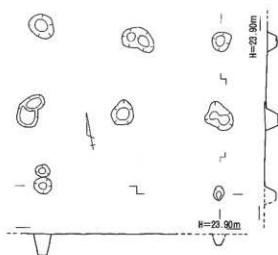
調査区の中央において検出した平面プランが隅丸正方形を呈する土壇である。長軸方位を $N-77^{\circ}-$



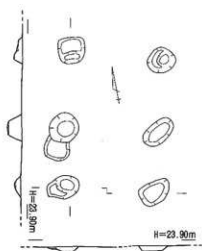
第18図 SB-04 実測図 [1/80]



第19図 SB-05 実測図 [1/80]



第20図 SB-06 実測図 [1/80]

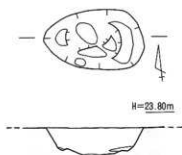


第21図 SB-07 実測図 [1/80]

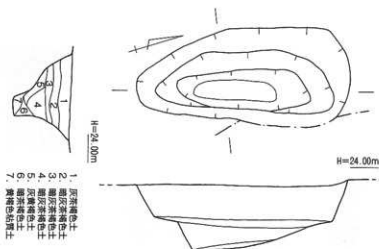
Wに取る。規模は $1.65\text{m} \times 1.55\text{m}$ 、深さ $0.12\text{m} \sim 0.25\text{m}$ を測る。SD-04を切り、SB-06に切られている。

SK-05 〈第26図〉

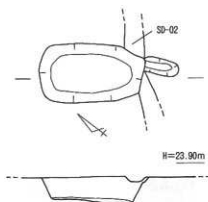
調査区の東側中央において検出した平面プランが長方形を呈すると思われる土壌である。土壌本体の大半は調査区外に出ており、全体像を把握する事は困難である。長軸方位を $N-87^{\circ}-E$ に取り規模は 1.25m



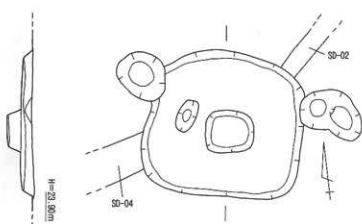
第22図 SK-01 実測図
[1/40]



第23図 SK-02 実測図 [1/40]



第24図 SK-03 実測図
[1/40]



第25図 SK-04 実測図 [1/40]

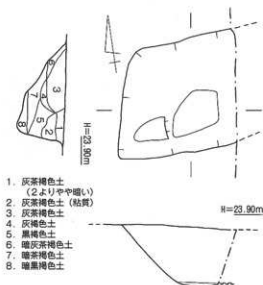
+ $\alpha \times 1.2\text{m}$ 、深さ 0.63m を測る。

SK-06 <第27図>

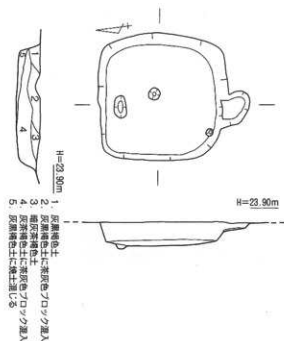
調査区の中央において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位を $N-6^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.35\text{m} \times 1.35\text{m}$ 、深さ 0.25m を測る。平面や断面形状を観察すると非常に丁寧な掘り方を有しており、非日常的な様相が伺える。SD-01・04に接する位置、または、SB-06に隣接し軸方位も似ていることから、これら遺構に伴う祭祀土壌と判断したい。出土遺物には完形の土師器坏身や土師皿、須恵器环蓋等もあり、祭事に使用した土器類を投棄した可能性もある。

SK-08 <第28図>

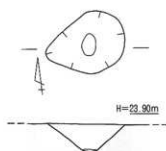
調査区の中央東側付近において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。長軸方位を $N-83^{\circ}-E$ に取る。規模は $0.85\text{m} \times 0.65\text{m}$ 、深さ 0.3m を測る。断面がすり鉢状を呈する特徴的な土壌だが、用途は不明。



第26図 SK-05 実測図 [1/40]



第27図 SK-06 実測図 [1/40]



第28図 SK-08
実測図 [1/40]



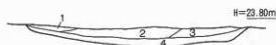
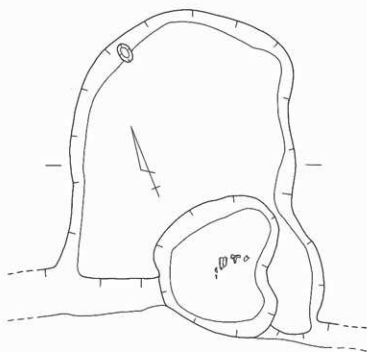
第29図 SK-09 実測図 [1/40]

SK-09 <第29図>

調査区の南東部周辺において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。長軸方位は不明。規模は $2.8\text{m} \times 2.5 + \alpha\text{m}$ 、深さ 0.2m を測る。一部が調査区外に出ており、全体像は定かでない。出土遺物には須恵器の坏身、皿、甕等がある。

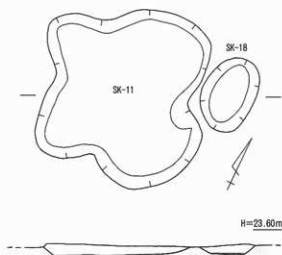
SK-10 <第30図>

調査区の南東端において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。長軸方位を $N-24^{\circ}-E$ に取る。規模は $3.2\text{m} \times 2.4\text{m}$ 、深さ $0.2\text{m} \sim 0.3\text{m}$ を測る。大型の土壌だが用途は不明。



1. 灰茶褐色土
2. 灰茶褐色土に焼土混じる
3. 暗茶褐色土
4. 暗灰茶褐色土に茶灰色土が混じる

第30図 SK-10 実測図 [1/40]



第31図 SK-11・18
実測図 [1/40]



第32図 SK-17
実測図 [1/40]

SK-11 <第31図>

調査区の南東端において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。長軸方位は不明。規模は1.86m × 2.0m、深さ0.13mを測る。出土遺物には瓦質の須恵器坏身、皿等がある。

SK-17 <第32図>

調査区の南側、SB-01・02に挟まれる箇所において検出した平面プランが円形を呈する土壌である。長軸方位をN-54°-Eに取る。規模は直径0.85m ~ 0.95m、深さ0.55mを測る。

SK-18 <第31図>

調査区の南東端において検出した平面プランが楕円形を呈する土壌である。長軸はほぼ磁北を向く。規模は0.8m × 0.55m、深さ0.1mを測る。

溝状遺構 (SD)

SD-01 <第15図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。規模は現状で検出長 35.2m、幅 0.5m、深さ 0.1m～0.15m を測る。西南西から東北東方向にほぼ一直線にあり、その傾きは磁北に対し $N-63^{\circ}-E$ に取る。本遺構から約 6m 南には同一方向に軸を持つ SD-03 が平行な関係性を持って存在していることから、両溝状遺構は相関関係を保ちながら同時期併存の遺構であったものと推定出来る。

SD-02 <第15図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。SK-03・04 に切られている。規模は現状で検出長 12.3m、幅 0.25m、深さ 0.05～0.1m を測る。切り合い関係や規模から SD-01・03 との関係性も考えたが、軸方向は両溝に対し鋭角になり、SD-01 より僅かに浅いことから同時並行での存在ではないと判断した。

SD-03 <第15図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。規模は現状で検出長 9.2m、幅 0.3m～0.5m、深さ 0.06m～0.1m を測る。SD-01 同様、西南西から東北東方向にほぼ一直線にあり、その傾きは磁北に対し $N-64^{\circ}-E$ に取る。本溝は SB-06 の手前で終結しており、構造的に考えた場合の延長部分と思われる SD-04 は SB-06 の西側から始まっていることから、SD-03・04 の間は 3m～4m の間隔が空いているものと思われる。本溝より南側に入るための陸橋の可能性も考えられる。

SD-04 <第15図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。規模は現状で検出長 18.8m、幅 0.35m～0.55m、深さ 0.1m を測る。SD-03 同様、西南西から東北東方向にほぼ一直線にあり、その傾きは磁北に対し $N-66^{\circ}-E$ に取る。本溝は SD-03 と構造的な同一性を持っているものと思われるが、その詳細は SK-04 に切られているため判然としない。しかしながら、SD-03 と軸方向の同一性と規模等の類似性から同時期存在と判断した。

SD-05 <第15図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。西南西～東北東方向に流路をとるが、SD-01・03・04 とは異なり大きく蛇行している。規模は現状で検出長 37.4m、幅 0.6m～0.7m、深さ 0.1m～0.2m を測る。SB-05・06 から切られており、A 期以前の古い遺構であると思われる。

SD-06 <第15図>

調査区南端付近において検出した溝状遺構。南北方向に軸を持つが、非常に小規模となっている。溝状遺構として扱っているが、細長形の土壌の可能性もある。規模は現状で検出長 3.0m、幅 0.35m、深さ 0.12m を測る。

SD-07 <第15図>

調査区南東端付近において検出した溝状遺構。本体の大半が調査区外にあり、詳細については不明。規模は現状で検出長 2.45m、幅 0.4m、深さ 0.1m を測る。

SD-08 <第15図>

調査区南東端付近において検出した溝状遺構。本体の大半が調査区外にあるものと思われ、詳細については不明。規模は現状で検出長 6.7m、幅 0.3m～0.5m、深さ 0.04m～0.1m を測る。

小 結

ここまで中里遺跡3地点検出の遺構について概観してきたが、ここで当該遺跡の特徴について記述したい。

最終的に、中里遺跡3地点においては、7棟の掘立柱建物、18基の土壌、8条の溝状遺構、その他柱穴等多数を検出した。

当該遺跡の主な時期はA期 7世紀中頃～後半を中心とした時期、B期 8世紀前半～中頃を中心とした時期、C期 8世紀後半を中心とした時期、の3時期に分かれる。

A期では3地点の中央部に集中する傾向がある。やや小振りではあるが、SB-05・06の2棟の総柱建物が建てられ、当該地で物資の集積が開始されたものと思われる。

B期は調査区南側部分に集中する傾向にあり、A期における建物からやや南に下げた地域を主な活用地としSB-02・03の2棟の側柱建物を建てている。内、SB-02は北辺に庇を有する建物で、当該遺跡中では最大規模の柱穴を有している。また、調査区中央部を斜角に貫くSD-01・03・04は、その規格性の高い直進性と溝間距離の並行性から道路状遺構と推定され、SB-02・03の建築時に並行して整備されたものと思われる。しかしながら、調査過程で硬化面や波板状遺構は検出されなかったようで、確定的な物証に乏しい。側溝と思われる各溝の遺存状況が10cm程度である事を考えれば、仕方のない部分であろう。

C期はB期より更に南側へ隔たる傾向がある。SB-01は前時期のSB-03の建て替えによるものと思われるが、SB-04においてはSB-02に比べ庇もなく、僅かながら建物としての規模を縮小している。これが何に起因するものか判断は出来ないが、当該地区に預けられた機能の一部が縮減されたものと考えたい。当該時期において道路状遺構と考えたSD-01・03・04が存続していたか否かについては判断材料が少ないが、B期との比較から建物の規格性が大きく損なわれてはいないため、C期までは存続していたものと考えたい。

袴田遺跡

遺跡の概要

古墳時代初頭頃から奈良時代後半までの遺構が検出されているが、中心となるものは古墳時代前半期の竪穴住居群、及び、7世紀後半～8世紀前半頃に比定される竪穴住居群と掘立柱建物群である。前者は調査区の中央やや北側に見られ、当該時期の集落に良く見られる散在状況にある。ほぼ同時存在と思われるが、若干SB-05が先行するだろうか。後者の竪穴住居群内におけるカマド設置状況を見ると北向きのグループと東向きのグループがあり、存続時期の違いが読み取れる。これに対し掘立柱建物群はSB-19を除き長軸方向を南北に向け整然と配置がなされており、特にSB-16～19における軸方位及び配置の在り方には規格外さを感じられる。SB-15・20についてはSB-19等から若干距離を有しているが、長軸方向はほぼ同じであり、近似した時期に存続していたものと思われる。

以下、各遺構・出土物の詳細について記述する。

なお、SK-03についてはカクランの可能性が高く、本文中からは削除している。

1) 遺構と出土遺物

竪穴住居 (SB)

SB-01 〈第33図〉

調査区北端において検出した平面プランが正方形を呈すると思われる竪穴住居である。長軸方位をN-4°-Wに取り、規模は長軸長2.9m、短軸長2.85m、深さ0.17mを測る。主柱穴と考えられるにピットは中央のP1を含め複数あると思われるが、特定は困難である。3本柱の建物であった可能性がある。東辺中央付近に方形の土壇状遺構がありカマド跡と思われるが、痕跡を失っており、可能性に留めたい。

SB-02 〈第33図〉

調査区北端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-13°-Wに取り、規模は長軸長3.7m、短軸長3.4m、深さ5cmを測る。地炉は不明確ながら住居中央の丸底壺付近に在していたものと思われる。主柱穴はP1～P3が該当するが、北西側においては穴を穿たず礎石や礎板等により主柱を支えていたものと思われる。これを主柱と捉えるならば4本柱の建物となる。南東隅にある直径1m程の土壇は貯蔵穴であろうか。

出土遺物として、土師器の丸底壺・坏身等が出土している。

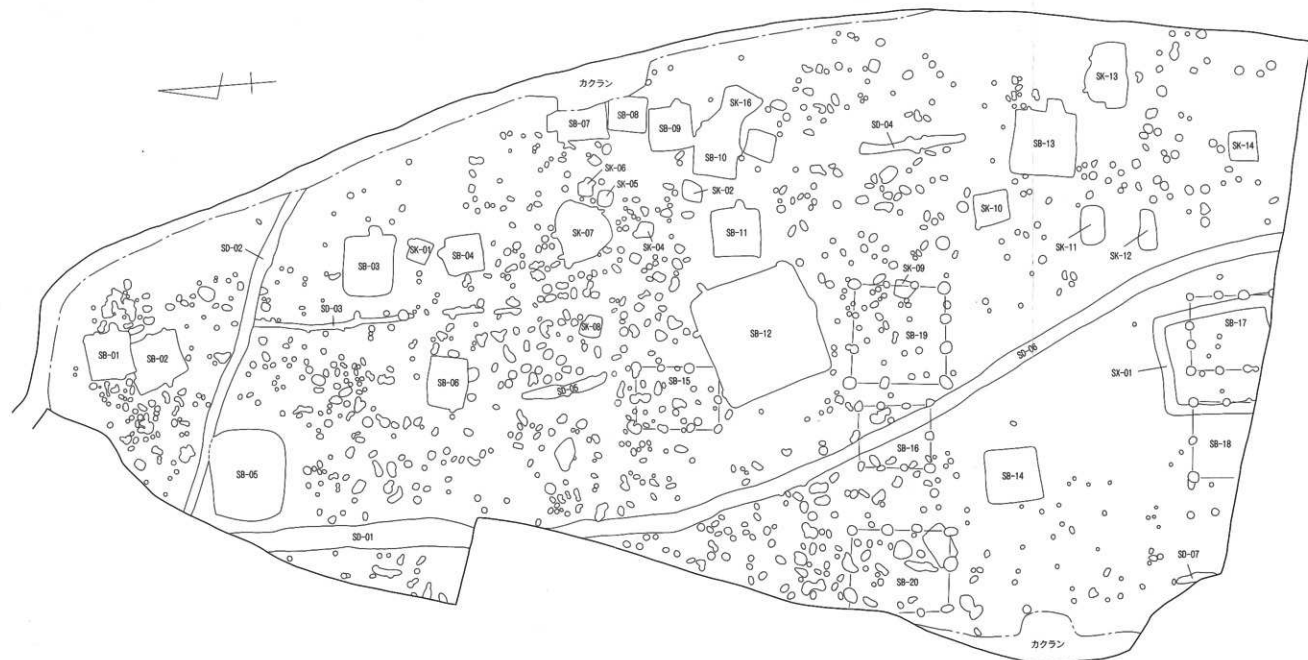


第33図 SB-01・02

実測図 [1/80]



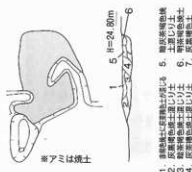
第34図 袴田遺跡 位置図 [1/2,500]



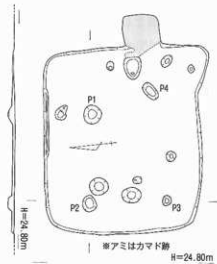
第35図 袴田遺跡 遺構配置図 (1/250)

SB-03 〈第36・37図〉

調査区北側付近において検出した平面プランが長方形を呈する竈穴住居である。長軸方位をN-85°-Wに取り、規模は長軸長3.95m、短軸長3.34m、深さ5cmを測る。主柱穴と考えられるピットはP1~P4がある。ややP4の位置がずれているが、建築当初のP4は礎石や礎板を用いたと思われ、建物としては4本柱の建物であった可能性が高い。東辺中央付近にカマド跡が、北辺中央付近には壁板と思われる板状痕跡が遺存している。



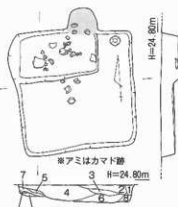
第36図 SB-03
カマド実測図 [1/40]



第37図 SB-03
実測図 [1/80]

SB-04 〈第38図〉

調査区北側付近において検出した平面プランが正方形を呈する竈穴住居である。長軸方位を北に取り、規模は長軸長2.6m、短軸長2.4m、深さ0.25mを測る。主柱穴が見当たらず、柱の配置状況は不明。小規模な建物でもあるため、無柱の建物の可能性もある。但し、カマドは付設されている事から、短期間での使用が考慮される。土層観察にて西側からの流入土が一気に押し寄せている状況が見える所は、この傍証となる。

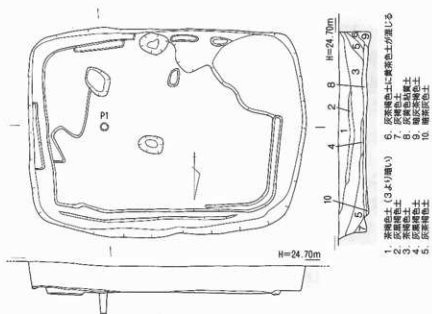


1. 暗灰褐色土
2. 暗灰褐色土
3. 暗灰褐色土に
灰土が少し混じる
4. 暗灰褐色土
5. 暗灰褐色土
6. 暗灰褐色土
7. 暗灰褐色土
(4よりやや細かい)
8. 暗灰褐色土
9. 暗灰褐色土
10. 暗灰褐色土

第38図 SB-04
実測図 [1/80]

SB-05 〈第39図〉

調査区北端付近において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する竈穴住居である。長軸方位をN-87°-Wに取り、規模は長軸長5.85m、短軸長4.25m、深さ0.6mを測る。地炉は不明確ながら住居中



第39図 SB-05 実測図 [1/80]

央の土器密集部分付近に在していたものと思われる。主柱穴はP1がその1本に該当するものと思われるが、西側の主柱穴は検出されていない。P1についても柱痕跡部分のみしか掘削されていないため、詳細を明らかにする事は困難である。棚状の遺構がC字形に住居内側を周っており、一部に壁溝状の溝が見られる。東西の窪みには完形品に近い多量の土器群が遺

存しており、突発的に住居そのものを放棄した感がある。

出土遺物として、土師器の丸底壺・甕形・二重口縁壺・高環・小型器台等が出土している。

SB-06 〈第40図〉

調査区北側付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を $N-82^{\circ}-W$ に取り、規模は長軸長3.4m、短軸長2.5m、深さ0.27mを測る。西辺にベッド状遺構と思われる施設を付設しているが、主柱穴と思われる柱穴等は一切見当たらず、居住に供された建物であるか否かについても判然としない。出土遺物についても皆無に近く、その性格については言及できないが、北辺付近にあるやや大型の台石が見られるところから、1つの可能性として無柱式の作業用建物であった事も考えられる。但し、物証が乏しいため推論の域を出ない。弥生時代後期頃の所産か。

SB-07 〈第41図〉

調査区中央西端において検出した平面プランが正方形を呈すると思われる竪穴住居である。長軸方位を北に取り、規模は長軸長3.4m、短軸長2.45m $+\alpha$ 、深さ0.2mを測る。北壁西寄りにカマドを付設する。主柱穴は不明。住居本体の東側1/3を攪乱により消失しており、規模・形態等不明点が多いが、カマド内より墨書土器が1点出土している。

出土遺物として、土師器の杯身・皿・高環等が出土している。

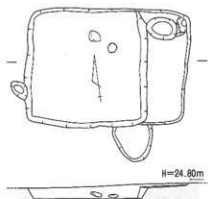
SB-08 〈第41図〉

調査区中央西端において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を $N-80^{\circ}-W$ に取り、規模は長軸長2.58m、短軸長2.48m、深さ0.55mを測る。SB-06同様、主柱穴と思われる柱穴等は一切見当たらず、居住に供された建物であるか否かについても判然としない。出土遺物についても少量であり、その性格付はできないが、他の竪穴住居と比較すると群を抜いて深く掘り下げており、土器等の出土も見られる事から、可能性として貯蔵穴状の竪穴であった事も考えられる。但し、これも推論の域を出ない。

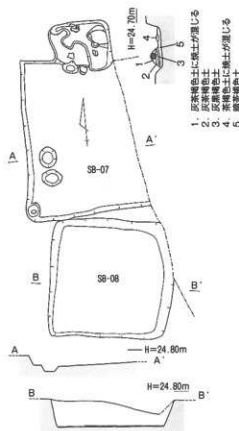
SB-09 〈第42図〉

調査区中央西端において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を北に取り、規模は長軸長2.85m、短軸長2.65m、深さ0.13mを測る。主柱穴と考えられるピットはP1があるが、本来1対になるべく柱穴が見当たらない。対となる東側においてはSB-05同様、穴を穿たず礎石や礎板等により主柱を支えていたものと思われる。それを主柱と捉えるならば2本柱の建物となる。東辺中央付近にカマドが付設されている。

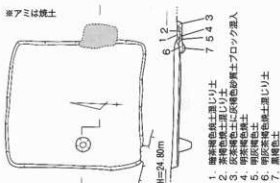
出土遺物として、土師器の鉢形等が出土している。



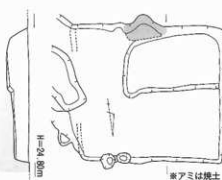
第40図 SB-06
実測図 [1/80]



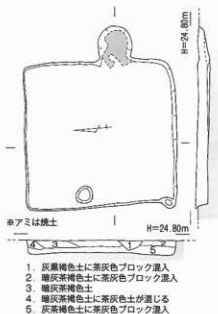
第41図 SB-07・08
実測図 [1/80]



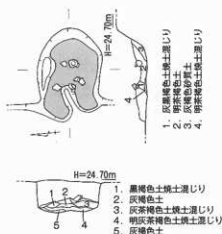
第42図 SB-09
実測図 [1/80]



第43図 SB-10
実測図 [1/80]



第44図 SB-11
実測図 [1/80]



第45図 SB-11
カマド実測図 [1/40]

SB-10 <第43図>

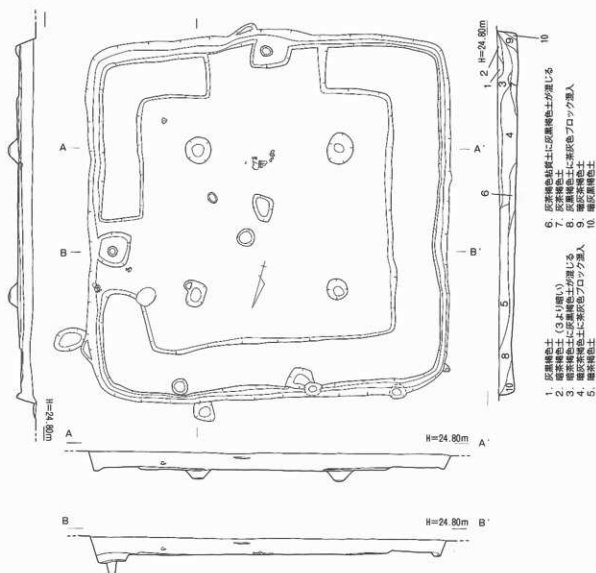
調査区中央西端において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を $N-82^{\circ}-W$ に取り、規模は長軸長 3.2m、短軸長 2.85m、深さ 0.3m ~ 0.35m を測る。主柱穴が見当たらず、柱の配置状況は不明。SB-04 同様、小規模な建物でもあるため無柱の建物の可能性もある。カマドは付設されている事から、短期間での使用が考慮される。

出土遺物として、須恵器の坏蓋、土師器の甕形等が出土している。

SB-11 <第44・45図>

調査区中央において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を北に取り、規模は長軸長 3.15m、短軸長 3.1m、深さ 0.25m を測る。SB-10 と同様、主柱穴が見当たらず、柱の配置状況は不明。小規模な建物ではないが無柱の建物の可能性もある。カマドは付設されている事から、短期間での使用が考慮される。土層観察による堆積状況は、比較的ゆっくり、自然に埋没していく状況が読み取れる。

出土遺物として、土師器の小型広口壺等が出土している。



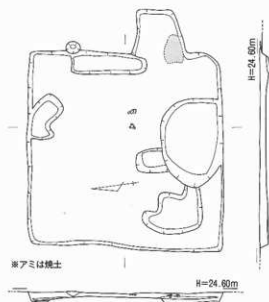
第46図 SB-12 実測図 [1/80]

SB-12 〈第46図〉

調査区中央において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-74°-Eに取り、規模は長軸長7.7m、短軸長7.6m、深さ0.35mを測る。地炉は建物規模に比してやや小規模であるが住居中央に0.6m×0.4mの規模で在していたものと思われる。主柱穴は4本あり、その柱間は3mを測る。平均幅90cmを測る大規模なベッド状遺構をC字形に住居内側を周しているが、東側の一部を切り2つ目の屋内土壌を付設している。目的は定かではないが、住居全体の規模や各パーツの大きさも考慮し、大人数収容の必要性が求められる建物であり、その為に屋内土壌が増設された可能性を考えたい。出土遺物として、土師器の皿破片等が出土している。

SB-13 〈第47図〉

調査区南東付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-82°-Wに取り、規模は長軸長4.1m、短軸長4.1m、深さ0.14mを測る。主柱穴と考えられるピットが見当たらず、柱の配置状況は不明。SB-04同様、小規模な建物ではないため上部構造については不明と言



第47図 SB-13
実測図 [1/80]



第48図 SB-14
実測図 [1/80]

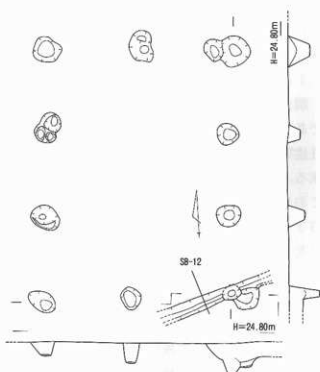
わざるを得ない。カマドは付設されている事から、生活に供した事実があったものと思われる。

出土遺物として、土師器の蓋等が出土している。

SB-14 〈第48図〉

調査区南西付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を東西に取り、規模は長軸長3.8m、短軸長3.6m、深さ0.13mを測る。SB-13同様、主柱穴と考えられるピットが見当たらず、柱の配置状況は不明。小規模な建物ではないため上部構造については不明と言わざるを得ない。東辺やや南寄りにカマドと考えられる施設が付設されている事から、生活に供した事実があったものと思われる。しかしながら、カマドと捉えるには若干脆弱であり、また、西辺においても焼土塊が壁面に貼付いているが、ごく簡易で短期的な火の使用であったため痕跡が薄い。これらから当該住居は定住的な住居とは考えにくい建物であると言える。1つの竪穴住居を複数のグループが短期的に使用した事も想定出来る。

出土遺物として、須恵器の把手付鉢、高台付坏身、土師器の坏身、甕形等が出土している。



第49図 SB-15
実測図 [1/80]

掘立柱建物 (SB)

15号掘立柱建物〈第49図〉

調査区中央において検出した10本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る2間×3間の側柱建物である。規模は $5.3m \times 4.0m$ 、床面積 21.2 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に楕円形を成している。重量物の搬入には不向きと思われる。

16号掘立柱建物〈第50図〉

調査区中央において検出した10本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る2間×3間の側柱建物である。規模は $4.6m \times 4.0m$ 、床面積 18.4 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形であるがやや楕円形なものも含まれ、全体的に小振りの柱穴を成している。重量物の搬入には不向きと思われる。

17号掘立柱建物〈第51図〉

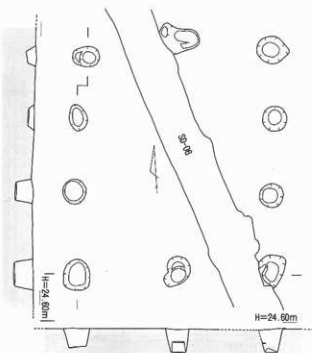
調査区南端において検出した掘立柱建物である。主軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る側柱建物である。規模は $5.75m \times 5.1m$ を測る。一部が調査区外に出ており、現在3間×3間分を見る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成している。柱圧痕は確認出来ていないが、やや大きめの柱穴であることから規模の大きな構造物であった可能性がある。

18号掘立柱建物〈第52図〉

調査区南端において検出した掘立柱建物である。主軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る側柱建物である。規模は $2.3m + \alpha \times 4.9m$ を測る。SB-17同様、一部が調査区外に出ており、現在2間×1間分を見る。柱穴掘方プランは基本的に正方形、または、長方形を成している。底面には柱圧痕が残っており、重量物が集荷されていたものと思われる。

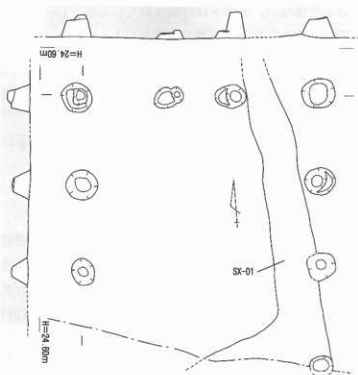
19号掘立柱建物〈第53図〉

調査区中央において検出した10本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る3間×3間の側柱建物である。規模は $6.5m \times 6.4m$ 、床面積 41.6 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成し、一部柱穴には2段掘りとなっているものがある。本遺跡内では最大規模の建物でもあり、中心的な機能を有していた構造物であっ



第50図 SB-16

実測図 [1/80]



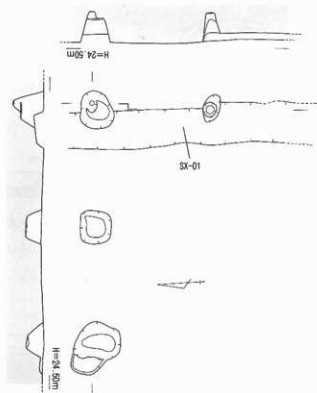
第51図 SB-17 実測図 [1/80]

た可能性がある。

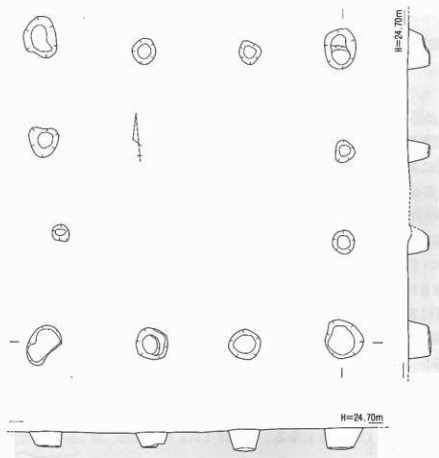
20号掘立柱建物〈第54図〉

調査区南西部付近において検出した掘立柱建物である。主軸方位をN-5°-Eに取る3間×3間と考えられる側柱建物である。規模は6.4m×5.4m、床面積34.6㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形または隅丸方形であるがやや楕円形なものも含まれる。全体的にやや大きめの柱穴を成している。床面積ではSB-19を下回るが、柱穴掘方の規模はそれを若干上回っている。

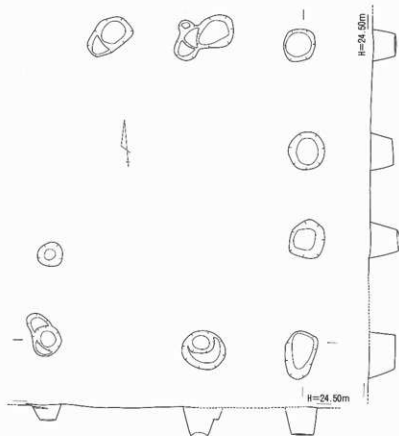
SB-19同様、本遺跡内で中心的な機能を有した建物であると考えられる。



第52図 SB-18
実測図 [1/80]



第53図 SB-19 実測図 [1/80]

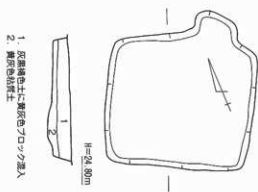


第54図 SB-20 実測図 [1/80]

土壇 (SK)

SK-01 <第55図>

調査区北側付近において検出した平面プランが正方形を呈する土壇である。長軸方位をN-28°-Eに取る。規模は1.4m~1.65m×1.55m、深さ0.24mを測る。平面形や垂直気味に立つ壁面から計画性の高い遺構ではあるが性格については言及出来ない。



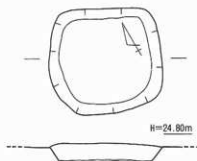
第55図 SK-01 実測図 [1/40]

SK-02 <第56図>

調査区中央東側付近において検出した平面プランが隅丸正方形を呈する土壇である。長軸方位をN-62°-Wに取る。規模は1.18m×1.1m、深さ0.18mを測る。

SK-04 <第57図>

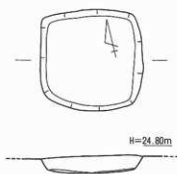
調査区中央東側付近において検出した平面プランが正方形を呈する土壇である。長軸方位をN-12°-Eに取る。規模は1.2m×1.18m、深さ0.18mを測る。SK-01同様、北辺壁に昇降



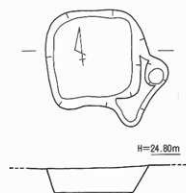
第56図 SK-02 実測図 [1/40]



第57図 SK-04
実測図 [1/40]



第58図 SK-05
実測図 [1/40]



第59図 SK-06
実測図 [1/40]



1. 暗茶褐色土
2. 灰茶褐色土に黄灰色粘質土ブロック混入

第60図 SK-07 土層断面実測図 [1/40]

口状の窪みがあり、規格性のある構造から貯蔵穴の可能性も浮上する。

SK-05 <第58図>

調査区中央東側付近において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位をN-14°-Eに取る。規模は1.06m×1.06m、深さ0.18mを測る。

SK-06 <第59図>

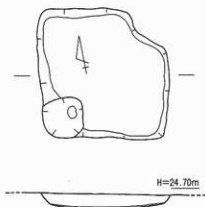
調査区中央東側付近において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位をN-6°-Eに取る。規模は1.23m×1.25m、深さ0.27mを測る。規模的にはSK-01に近似しているが、性格付けには言及出来ない。

SK-07 <第60図>

調査区中央東側付近において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。軸方位は不明。規模は4.0m×3.8m、深さ0.22m～0.52mを測る。出土遺物は確認出来るものの、平面形や内部の遺構配置状況を考慮すると台地の窪みとも考えられる。また、本遺構周辺に展開する建物群はほぼ等距離に距離を取っている事も、この推測を補完している。

SK-08 <第61図>

調査区中央付近において検出した平面プランがややL字形を成す方形を呈する土壌である。長軸方位を東西に取る。規模は1.35m×1.35m、深さ0.15mを測る。



第61図 SK-08
実測図 [1/40]

SK-09 〈第62図〉

調査区中央において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位はN-5°-Eに取る。規模は1.0m×0.87m、深さ0.6mを測る。

SK-10 〈第63図〉

調査区南側付近において検出した平面プランが正円形を呈する土壌である。長軸方位をN-5°-Wに取る。規模は2.15m×2.03m、深さ0.4mを測る。規模・形状及び位置関係から考えてSB-12に伴う貯蔵穴の可能性を考慮する必要がある。

SK-11 〈第64図〉

調査区南側において検出した平面プランが楕円形を呈する土壌である。

長軸方位をN-88°-Wに取る。規模は2.4m×1.7m、深さ0.65mを測る。土師器の壺形土器破片が出土している。

SK-12 〈第65図〉

調査区南側において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-86°-Wに取る。規模は3.0m×1.15m～1.35m、深さ0.25m～0.43mを測る。段掘状になった断面形態及び各種土器の出土状況から廃棄土壌の可能性も考えたい。

出土遺物として土師器の甑・坏身、須恵器の高坏・坏身・蓋・壺形等がある。

SK-13 〈第66図〉

調査区南東端において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-86°-Wに取る。規模は4.3m×2.7m、深さ0.7mを測る。

出土遺物として赤焼けの須恵器坏身・蓋、土師器の坏身等がある。

SK-14 〈第67図〉

調査区南西端において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位をN-6°-Eに取る。規模は1.93m×1.93m、深さ0.3mを測る。

SK-16 〈第68図〉

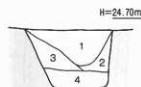
調査区中央東側において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-52°-Wに取る。規模は3.0m×α×1.8m～2.35m、深さ0.2mを測る。

SB-10との切り合い関係が明確でないため断定は出来ないが、弥生時代中期～後期頃に出現する縦長長方形タイプの建物の可能性も考えられる。

溝状遺構 (SD)

SD-01 〈第35・69図〉

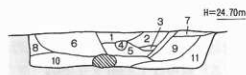
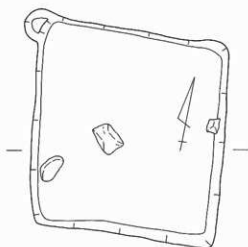
調査区北側付近において検出した溝状遺構。南北方向に流路をとる。規模は現状で検出長15.3m、幅1.2m



1. 灰茶褐色土に黄灰色土が混じる
2. 灰茶褐色土に茶灰色土が混じる
3. 灰茶褐色土に黄褐色土が混じる
4. 黒褐色土

第62図 SK-09

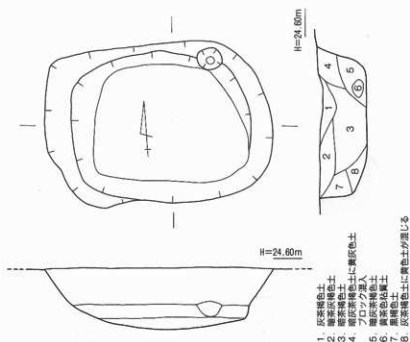
土層断面実測図 [1/40]



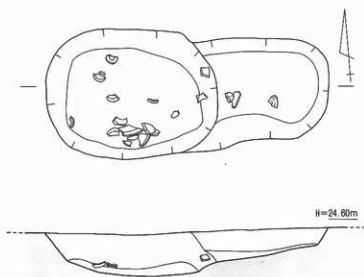
1. 暗茶褐色土に茶灰色土が混じる (6より濃い)
2. 灰茶褐色土
3. 灰茶褐色土に黄灰色土が混じる
4. 暗茶褐色土
5. 暗茶褐色土に黒褐色土が混じる
6. 暗茶褐色土に茶灰色土が混じる
7. 灰茶褐色土
8. 暗茶褐色土に茶灰色土が混じる
9. 灰茶褐色土
10. 暗茶褐色土に茶灰色土が混じる
11. 灰茶褐色土に茶灰色土が混じる

第63図 SK-10

実測図 [1/40]



第64図 SK-11 実測図 [1/40]



第65図 SK-12 実測図 [1/40]

～1.6m、深さ0.55m～0.68mを測る。検出状況からSD-06に繋がるものと思われ、同一溝と考える事が妥当である。

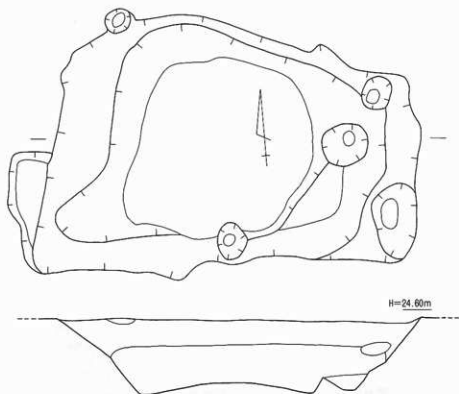
出土遺物として須恵器坏蓋、土師器皿等がある。

SD-02 <第35・70図>

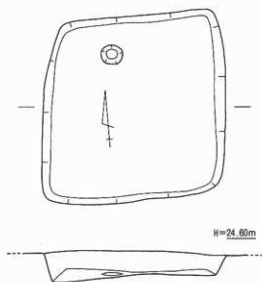
調査区北側において検出した溝状遺構。東西方向に流路をとる。規模は現状で検出長23.2m、幅0.5m～1.0m、深さ0.76m～0.9mを測る。

SD-03 <第35図>

調査区北側において検出した溝状遺構。南北方向に流路をとる。規模は現状で検出長15.3m、幅0.3m、深さ0.03m～0.07mを測る。



第66図 SK-13 実測図 [1/40]



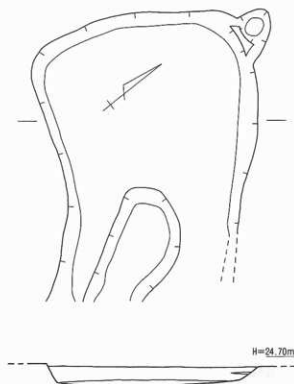
第67図 SK-14 実測図 [1/40]

SD-04 <第35図>

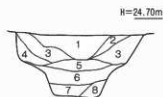
調査区中央東側において検出した溝状遺構。流路方向を南北に取り、底面レベルを僅かに北から南に向け下げている。規模は現状で検出長7.1m、幅0.6m、深さ0.04m～0.1mを測る。

SD-05 <第35図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。規模は現状で検出長5.8m、幅0.7m、深さ0.13mを測る。

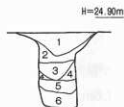


第68図 SK-16 実測図 [1/40]



1. 灰茶褐色土
2. 茶褐色土
3. 灰茶褐色土
4. 灰茶褐色粘質土
5. 暗茶褐色土
6. 灰茶色粘質土
7. 暗茶褐色粘質土
8. 黄茶褐色粘質土

第69図 SD-01
土層断面実測図 [1/40]



1. 黒褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 灰茶褐色土
4. 灰茶褐色土 (3よりやや暗い)
5. 灰茶褐色土に黒褐色土ブロック混入
6. 黒褐色土に黄土ブロック混入

第70図 SD-02
土層断面実測図 [1/40]



1. 灰茶褐色土
2. 茶褐色土
3. 黄茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 黒褐色土

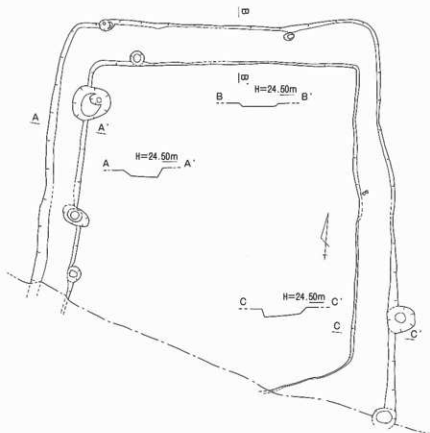
第71図 SD-06
土層断面実測図 [1/40]

SD-06 <第35・71図>

調査区中央付近において検出した溝状遺構。南北方向に流路をとる。規模は現状で検出長52.3m、幅0.9m～1.1m、深さ0.35m～0.45mを測る。SD-01と同一溝と思われる。

SD-07 <第35図>

調査区南西端において検出した溝状遺構。流路方向不明。規模は現状で検出長2.5m、幅0.63m、深さ0.2mを測る。当時の調査担当者は溝状遺構と判断されているが、検出状況を考えてと溝状と判断するには材料が乏しいと言わざるを得ない。



第72図 SX-01 実測図 [1/80]

周溝状遺構 (SX)

SX-01 <第72図>

調査区南端において検出した平面プランが長方形を呈する周溝状の遺構である。長軸方位をN-5°-Eに取る。規模は検出全長8.3m+α、幅7.6m、深さ0.1m~0.2mを測る。周溝部の掘り方断面は逆台形を呈している。

平面形を観察すると、南側が北側に比しやや幅広となっている。この形状は西山ノ上遺跡2次調査で見られたSX03と同様の形状であることから、本遺構は弥生時代後期後半~古墳時代前半期の所産であると思われる。

小 結

ここまで袴田遺跡検出の遺構について概観してきたが、ここで当該遺跡の特徴について記述したい。

最終的に、袴田遺跡においては14軒の竪穴住居、6棟の掘立柱建物、14基の土壇、6条の溝状遺構、1基の周溝状遺構を検出した。

集落の主な時期は1期 弥生時代後期後半~古墳時代前半、2期 7世紀後半~8世紀前半、3期 8世紀中頃~9世紀前半の3時期に分かれる。

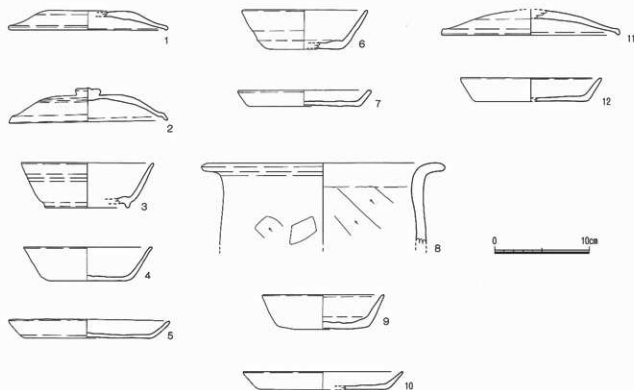
1期目は調査区の北端、中央、南端にそれぞれ1~2程度の遺構が見られる位の検出頻度であり、遺構密度は非常に低い。しかしながら、樋の口遺跡2次調査等、当該時期の集落遺跡の調査例を見ると、集落

の核となり得る大型住居周辺にやや距離をおいて一辺4m～5m程度の竪穴住居が散在するという状況が見られる。これを集落内における階層性の突出と見るか、集会所に類似する公共的な施設を中心とした集落構成と見るか判断に苦しむところではあるが、同様の類似例の増加を待ちつつ、出土品の差異が明確か否か判断が可能な資料の遭遇を期待したい。

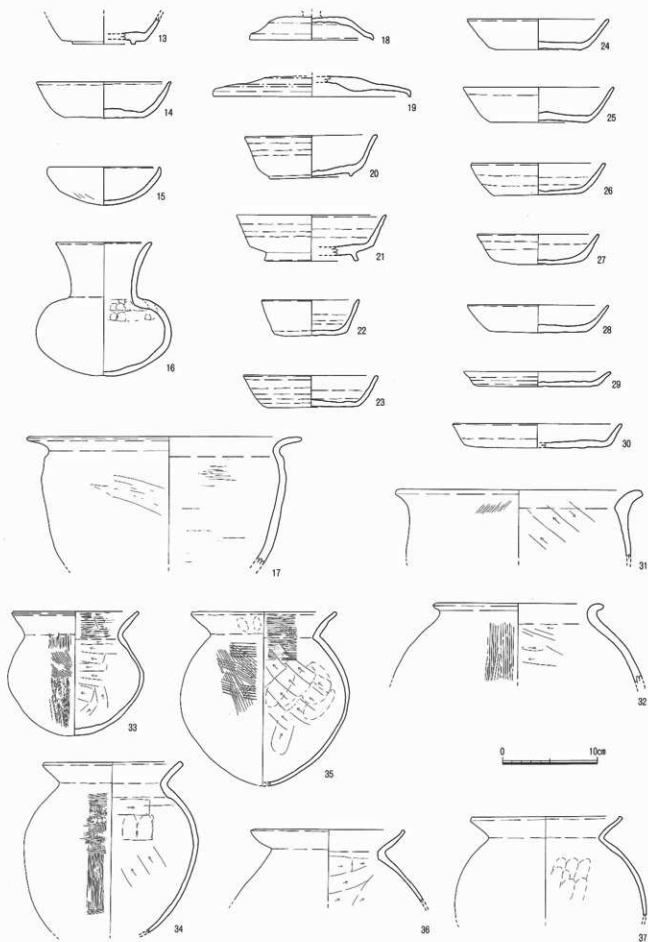
2期目は調査区北東部分に集中する傾向にあり、住居北辺にカマドを設置するやや小型の竪穴住居が肩を寄せ合うように営まれている。古墳時代前半期以降、居住域として活用が成されなかった当該地に新規参入した住居群であるが、その直接的な原因については明確な物証なく、言及は出来ない。しかしながら、SB-07から出土した墨書土器の存在は、当該地が将来的に供されるべく利用目的を暗示している可能性もあり、注目に値する。

3期目は2期からの継続として理解出来、袴田遺跡が最も隆盛を誇った時期でもある。竪穴住居の主軸が南北方向に統一され、付設されたカマドが全て北向きに変化している。また竪穴住居の主軸に対し直角、または、並行方向を向く掘立柱建物群には意図された規格性が見られ、竪穴住居群とは一定距離を保ちながら住み分けが実施されている状況から、3期当初から目的を持って計画的に配置された集落構成と言っても過言でない状況となっている。

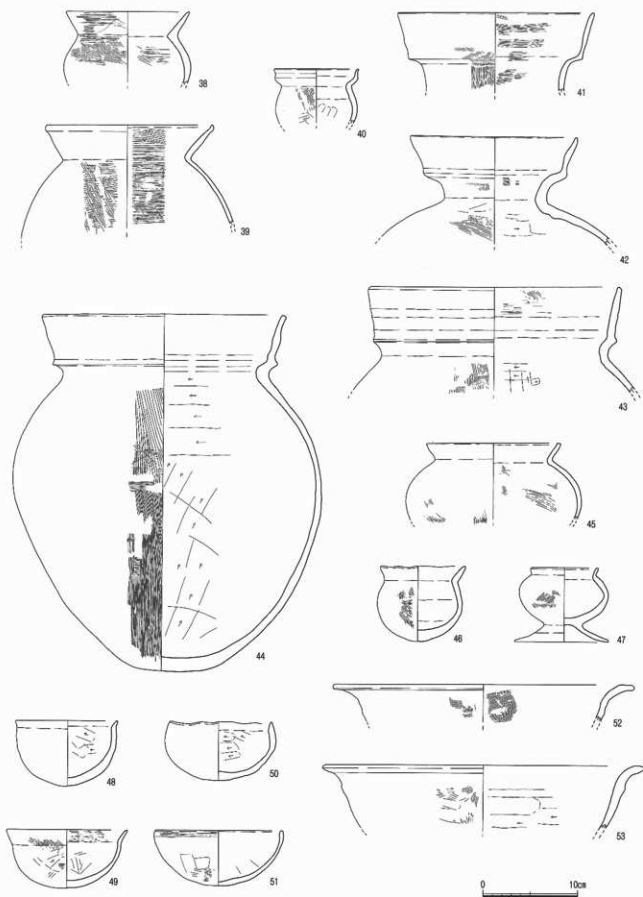
SD-07から出土した墨書土器の1文字が示す「倉」に関連した施設群であれば識字層が意図的に計画し造られた集落であると想定でき、本遺跡は当該地域の特殊な土地利用の一端を垣間見る事が出来る好例と言えるのではなかろうか。



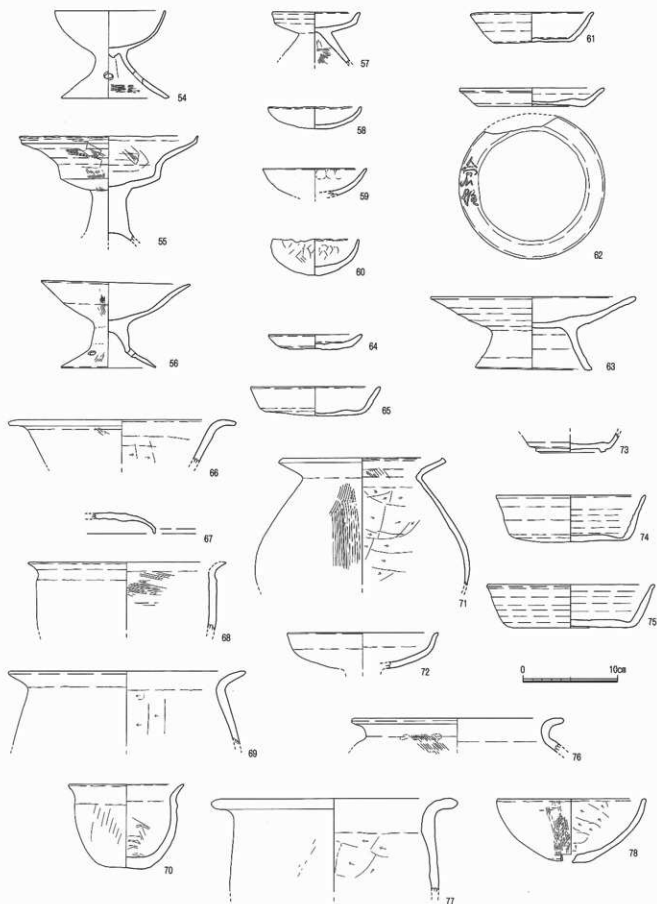
第73図 中里遺跡3地点 出土遺物実測図 [1/4]



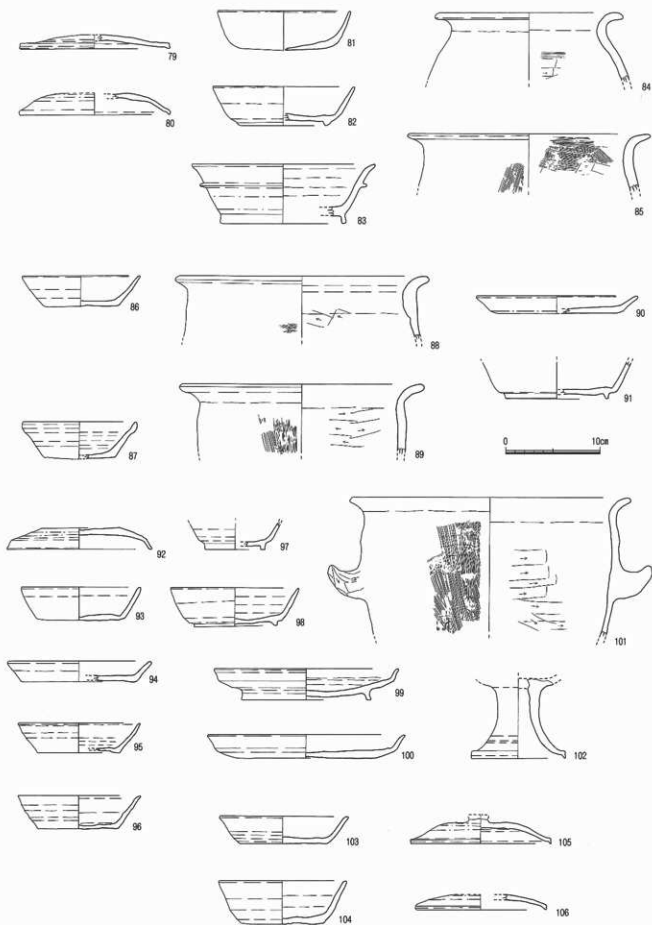
第74図 袴田遺跡 SB-O 1 (13・14)、SB-O 2 (15・16)、SB-O 3 (17)、SB-O 4 (18～32)、
SB-O 5 (33～37) 出土遺物実測図 [1/4]



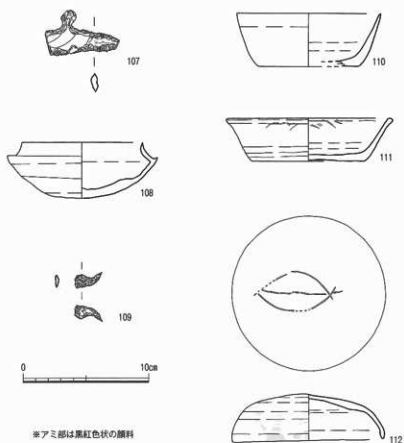
第75図 袴田遺跡 SB-05 出土遺物実測図 [1/4]



第76図 袴田遺跡 SB-05(54~60)、SB-07(61~63)、SB-08(64・65)、SB-09(66)、
SB-10(67・68)、SB-11(69・70)、SB-12(71)、SB-13(72) 出土遺物実測図 [1/4]



第77図 袴田遺跡 SB-1 9(79~85)、SK-0 7(86~89)、SB-1 1(90・91)、SK-1 2(92~102)、SK-1 3(103~105)、SD-0 1(106) 出土遺物実測図 [1/4]



第78図 井手口遺跡 SD-05(107)、SD-07(108)、SD-16(109)、
SD-17(110~112) 出土遺物実測図 [1/3]

挿 図	番 号	実測 番号	出土遺構	機種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調・胎土・焼成	備考
73図	1	R-16	SD-08	坏蓋	16.4			外ケズリ・ナデ	淡黄茶褐色。砂粒含む、不良	須恵器
	2	R-14	SK-06	坏蓋	16.7			外ケズリ・ナデ、内ナデ	淡黄茶褐色。赤色細砂粒含む、良好	
	3	R-11	〃	高台付坏身	13.9	8.9	4.8	内外ナデ	淡黄灰色。砂粒含む、やや不良	
	4	R-5	〃	坏身	13.5	8.7	3.6	内外ナデ	淡黄茶褐色。赤色細砂粒含む、良好	外底部へう切り
	5	R-10	〃	皿	17	13.5	2	内外ナデ	淡黄茶褐色。赤色砂粒含む、不良	外底部へう切り
	6	R-1	SK-09	坏身	13.2	8.1	4.2	内外ナデ	淡灰色。細砂粒含む、良好	
	7	R-2	〃	皿	14	11.8	1.7	内外ナデ	淡灰色。砂粒含む、良好	外底部へう切り
	8	R-18	SK-11	甕形	24.6			内外ケズリ	淡黄褐色。砂粒含む、やや不良	
	9	R-3	〃	坏身	12.8	9.8	3.6	内外ナデ	淡灰褐色。砂粒少量含む、良好	外底部へう切り
	10	R-8	〃	皿	16.9				乳灰色。砂粒含む、不良	
	11	R-20	SK-16	坏蓋	18.8			外ケズリ	淡黄茶褐色。赤色細砂粒含む、不良	
	12	R-9	〃	皿	14.9				淡黄茶褐色。砂粒含む、不良	
74図	13	R-210	SB-01	高台付坏身		6.7		内外ナデ	暗灰色。細砂粒含む、良好	須恵器
	14	R-207	SB-01	坏身	14.3	8.6		内外ナデ、外底ケズリ	淡黄褐色。細砂粒含む、良好	
	15	R-202	SB-02	坏身	11.6			外ケズリ・内ヘラミガキ	淡黄褐色。細砂粒含む、良好	
	16	R-204	〃	長頸壺	10	14	2.6	内外ヘラミガキ	黄褐色。細砂粒含む、良好	
	17	R-201	SB-03	甕形	30			内外ケズリ	淡黄褐色。砂粒含む、良好	
	18	R-89	SB-04	坏蓋	13	2.4		外ケズリ・内ヨコナデ	淡黄灰色。黒色粒を含む、良好	須恵器
	19	R-91	〃	坏蓋	10.4	2.1		外ケズリ・内ヨコナデ	淡黄灰色。大粒砂粒を含む、良好	須恵器
	20	R-73	〃	高台付坏身	13.9	8.6	4.5	ナデ	淡黄灰色。黒色粒を含む、不良	須恵器
	21	R-78	〃	高台付坏身	15.8	10	4.9	内外ナデ	淡黄灰色。大粒砂粒を含む、良好	須恵器
	22	R-68	〃	坏身	10.3	7.6	3.7	ナデ、外底ヘラケズリ	淡黄褐色。赤色細砂粒含む、良好	
	23	R-64	〃	坏身	7.2	9.6	3.4	ナデ、外底ヘラケズリ	淡黄褐色。砂粒含む、良好	
	24	R-63	〃	坏身	14.8	9	3.2	ナデ、外底ヘラケズリ	淡黄褐色。砂粒含む、良好	
	25	R-61	〃	坏身	15.8	10.4	3.7	ナデ、外底ヘラケズリ	淡黄茶褐色。砂粒含む、良好	
	26	R-65	〃	坏身	14	9.5	3.5	ナデ、外底ヘラケズリ	淡黄褐色。赤色細砂粒含む、やや不良	
	27	R-66	〃	坏身	12.8	9.1	3.2	ナデ	淡黄灰色褐色。砂粒含む、不良	
	28	R-62	〃	坏身	14.8	10.2	2.9	ナデ、外底ヘラケズリ	淡黄褐色。砂粒含む、良好	
	29	R-71	〃	皿	15.5	12.5	1.6	ナデ	淡黄暗褐色。黒色粒を含む、良好	底部に粘土結晶き上げ痕跡
	30	R-70	〃	皿	17.7	15.4	2.5	ナデ	淡黄灰色。砂粒含む、良好	底部に粘土結晶き上げ痕跡
	31	R-83	〃	甕形	15.4			内ケズリ	淡黄暗褐色。細砂粒含む、やや不良	外面に煤付着
	32	R-85	〃	短頸壺	17.2			外ハケ、内ケズリ	淡黄褐色。大粒砂粒含む、やや不良	
	33	R-134	SB-05	丸底壺	13.2		10.3	外ハケ、内ケズリ	淡黄褐色。大粒砂粒含む、良好	
	34	R-5	〃	甕形	14.5			外タタキ後ハケ、内ヘラケズリ	淡黄茶褐色。大粒砂粒含む、良好	
	35	R-3	〃	甕形	15		18.4	外タタキ後ハケ、内ヘラケズリ	淡黄茶褐色。大粒砂粒含む、良好	
	36	R-168	〃	甕形	16			外ハケ、内ケズリ	淡黄褐色。細砂粒含む、良好	
	37	R-4	〃	甕形	15.6			外ハケ	淡黄茶褐色。大粒砂粒含む、不良	
75図	38	R-212	SB-05	丸底壺	13			内外ハケ	淡黄暗褐色。細砂粒含む、良好	
	39	R-2	〃	甕形	17.6			外タタキ後ハケ、内ハケ	淡黄茶褐色。砂粒含む、やや不良	
	40	R-109	〃	小型丸底壺	8.8			外ハケ、内ナデ	淡黄暗褐色。細砂粒含む、良好	
	41	R-167	〃	二重口縁壺	20.8			外ハケ・ナデ、内ハケ	黄灰色褐色。砂粒含む、良好	
	42	R-198	〃	二重口縁壺	17.7			外ハケ・ナデ、内ハケ・ケズリ	淡黄茶褐色。砂粒含む、やや不良	
	43	R-116	〃	甕形	26.8			外ハケ・ナデ、内ナデ・ケズリ	淡黄褐色。細砂粒含む、やや不良	山陰系
	44	R-A	〃	甕形	25.5		37.4	外ハケ・ナデ、内ナデ・ケズリ	黄褐色。細砂粒含む、良好	山陰系

第 1 表 出土遺物観察表

45	R-216	※	壺形	14.2		外ハケ後ナデ、内ハケ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
46	R-130	※	小型丸座蓋	9	7.9	外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、良好	黒斑あり
47	R-215	※	小型脚付蓋	7	10.4	7.8 外ハケ、内ナデ、脚部ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
48	R-126	※	鉢形	10.8	6.9	外ナデ、内ケズリ	淡黄褐色、黒色砂粒含む、良好	黒斑あり
49	R-124	※	鉢形	12.7	6.2	外ハケ・ケズリ、内ナデ後ケズリ	淡黄褐色、黒・赤色砂粒含む、良好	
50	R-127	※	鉢形	10.8	6.2	外ナデ・ケズリ、内ケズリ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
51	R-106	※	鉢形	13.4	5.8	外ヘラナデ後ハケ、内ヘラナデ	淡黄褐色、赤色砂粒含む、やや不良	
52	R-103	※	鉢形	31.4		内外ハケ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	外面に煤付着
53	R-104	※	鉢形	33.2		外ハケ後ケズリ、内ケズリ	淡黄褐色、大粒砂粒含む、良好	
76回	54 R-184	SB-05	高坏	11.6	11.4	9.2 外ハケ、内ナデ	黄褐色、細砂粒含む、良好	
	55 R-135	※	高坏	15.9		外ヘラ後ハケ、内ヘラ後ナデ	淡黄褐色、大粒砂粒含む、やや不良	
	56 R-1	※	高坏	15.9	10	9 外ハケ・ナデ、外ハケ	淡黄褐色、赤色砂粒含む、やや不良	黒斑あり
	57 R-131	※	舞台	9.2		不明	淡黄褐色、赤色砂粒含む、やや不良	
	58 R-125	※	坏身	9.7	2.3	内外ナデ	淡黄褐色、赤色砂粒含む、良好	
	59 R-169	※	坏身	11		内外ナデ	淡灰色、細砂粒含む、良好	
	60 R-122	※	坏身	9	3.3	外ナデ、内指押え後ナデ	淡黄褐色、赤色砂粒含む、良好	
	61 R-179	SB-07	坏身	13	7.6	3.2 内外ナデ	明茶褐色、赤色・細砂粒含む、良好	
	62 R-A	※	皿	14.3	11.4	1.9 内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	体部外面に黒書
	63 R-178	※	脚付皿	21.8	12.4	7.6 内外ナデ	明茶褐色、赤色・細砂粒含む、良好	
	64 R-183	SB-08	皿	9.9	7.8	1.5 内外ナデ、底部ヘラ切	淡黄褐色、赤色・細砂粒含む、良好	
	65 R-181	※	坏身	13.7	11.6	3.1 内外ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、良好	
	66 R-184	SB-09	鉢形?	24.2		内ハケ、外ナデ・ケズリ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
	67 R-186	SB-10	坏蓋			内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡灰色、細砂粒含む、良好	須臾器
	68 R-185	※	壺形	21.2		内ハケ、外ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
	69 R-188	SB-11	壺形	25		内ナデ・ケズリ、外ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、やや不良	外面に煤付着
	70 R-187	※	鉢形	12.2	4.9	8.8 内ナデ後ケズリ、外ハケ	淡黄褐色、細砂粒含む、やや不良	
	71 R-189	SB-12	壺形	17.8		内ケズリ、外ハケ	淡黄褐色、細砂粒含む、やや不良	
	72 R-197	SB-13	高坏	16		内ナデ、外ケズリ	暗茶褐色、砂粒含む、良好	
	73 R-196	SB-14	高台付坏身	7.3		内外ナデ	淡灰色、砂粒含む、良好	須臾器
	74 R-195	※	鉢形	15.8	12	4.9 内外ナデ	黄褐色、細砂粒含む、不良(生焼け)	
	75 R-52	※	鉢形	17.5	6.2	4.6 内外ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
	76 R-55	※	壺形	22.2		ハケ、ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
	77 R-193	※	壺形	26.2		内ナデ・ケズリ、外ハケ	黄茶褐色、砂粒含む、良好	
	78 R-194	※	鉢形瓶	15.5		6.7 内ケズリ、外ハケ	黄茶褐色、砂粒含む、良好	
77回	79 R-23	SB-19	坏蓋	15.6		1.5 内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	須臾器
	80 R-16	※	坏蓋	17.8		内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄褐色、黒色粒・砂粒含む、良好	須臾器
	81 R-7	※	坏身	14	9.2	4.2 内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄褐色、赤色粒・砂粒含む、不良	須臾器
	82 R-10	※	高台付坏身	15	8.8	4.2 内ナデ、外高台ケズリ	淡黄褐色、細砂粒含む、不良	須臾器
	83 R-54	※	高台付坏身	19.4	13.4	6.3 内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄褐色、黒色粒・砂粒含む、良好	須臾器
	84 R-11	※	壺形	20.1		内ナデ・ケズリ、外ハケ	淡黄褐色、赤色粒・砂粒含む、良好	
	85 R-12	※	壺形	15.4		内ハケ後ケズリ、外ハケ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
	86 R-140	SK-07	坏身	12.4	7.8	3.3 内外ナデ、底部ヘラ切	淡黄褐色、赤色粒・砂粒含む、やや不良	
	87 R-139	※	坏身	12		内外ナデ、底部ヘラ切	灰色、細砂粒含む、良好	
	88 R-136	※	壺形	26.3		内ケズリ、外ハケ	淡黄褐色、大粒砂粒含む、良好	
	89 R138	※	壺形	25.4		内ケズリ、外ハケ	淡黄褐色、赤色粒・砂粒含む、良好	
	90 R-40	SK-11	皿	18.8	12.6	1.9 内ケズリ、外ケズリ・ナデ	淡黄褐色、赤色粒・砂粒含む、良好	

"	91	R-163	"	高台付坏身		11		内外ナデ	淡灰色、砂粒含む、良好	須惠器
"	92	R-51	SK-12	坏蓋	15.4		2.3	内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄灰色、大粒砂粒含む、やや不良	須惠器
"	93	R-36	"	坏身	12.6	9.2	3.5	内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄灰色、細砂粒含む、良好	須惠器
"	94	R-42	"	坏身	15	12	2.2	内外ナデ	淡黄明茶褐色、赤色粒・砂粒含む、良好	
"	95	R-43	"	坏身	12.8	8.8	3.15	内ナデ、外ナデ、ヘラ切り	灰色、大粒砂粒含む、良好	須惠器
"	96	R-175	"	坏身	13.1	8.5	3.5	内ナデ、外ナデ、ヘラ切り	灰色、大粒砂粒含む、良好	須惠器
"	97	R-47	"	高台付坏身		6.4		内外ナデ、外底面ケズリ	淡黄灰色、黒色粒・砂粒含む、良好	須惠器
"	98	R-44	"	高台付坏身	13.5	8.7	4.1	内外ナデ	淡黄灰色、黒色粒・砂粒含む、良好	須惠器
"	99	R-148	"	高台付皿	19.4	13.9	3.3	内外ナデ、外底面ケズリ	淡黄灰色、砂粒含む、良好	須惠器
"	100	R-141	"	皿	20.8	14.4	2.5	内外ナデ、外底面ケズリ	淡黄明褐色、赤色粒・砂粒含む、不良	
"	101	R-58	"	甔	29.4			内ケズリ、外ハケ	淡黄明茶褐色、大粒砂粒含む、良好	
"	102	R-60	"	高坏脚部		10		内外ナデ	淡黄灰色、細砂粒含む、良好	須惠器
"	103	R-34	SK-13	坏身	13.5	9.2	2.9	内外ナデ、外底面ケズリ	淡黄暗茶褐色、赤色粒・砂粒含む、不良	須惠器
"	104	R-45	"	坏身	13.4	8.8	4.6	内外ナデ、外底面ケズリ	淡灰色、大粒砂粒含む、やや不良	須惠器
"	105	R-50	"	坏蓋	14.9			内ナデ、外ナデ・ケズリ	緑灰色、大粒砂粒含む、良好	須惠器
"	106	R-21	SD-01	坏蓋	13.8			内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄茶灰色、砂粒含む、良好	須惠器
78回	107	R-9	SD-05	石籠	5.8	3.45	0.48		サスカイト製、重さ：10.5g	
"	108	R-5	SD-07	坏身	9.6		4.5	内ナデ、外ナデ・ケズリ	淡黄灰色、精選される、良好	須惠器
"	109	R-10	SD-16	異形石器	1	1.9	0.3		黒曜石製、重さ：0.6g	
"	110	R-4	SD-17	坏身	11.4	8	4.2	ナデ?	淡黄茶褐色、精選される、良好	
"	111	R-1	"	坏身	13.25	9	3.4	内外ヘラナデ?	茶褐色、精選・赤色粒を含む、良好	
"	112	R-6	"	坏蓋	12	3.65		内外ナデ	黄茶灰色、精選される、良好	外面にヘラ記号

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



遺構名

掲載番号

PL 1 (井手口遺跡)



(1) 井手口遺跡 調査前風景



(2) 井手口遺跡 調査区西側(北東より)



(3) 井手口遺跡 調査区東側(西より)



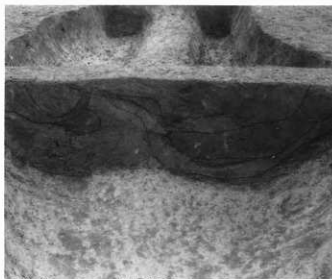
(4) 井手口遺跡 調査区東側(東より)



(5) 井手口遺跡 調査区東側(南より)



(6) SB-01 (北より)



(1) SD-01 土層断面



(2) SD-07 (東より)



(3) SD-16 土層断面



(4) 中里遺跡 遺構検出時状況 (西より)



(5) 中里遺跡 遺構検出時状況 (東より)

PL 3 (中里遺跡3地点)



(1) 中里遺跡3地点 全景(北より)



(2) 中里遺跡3地点 全景(南より)



(3) 調査区中央付近(西より)



(4) SD 周辺(西より)



(5) SB-01(南より)



(6) SK-04(北より)



(1) SK-06 (東より)



(2) SK-06 出土遺物状況



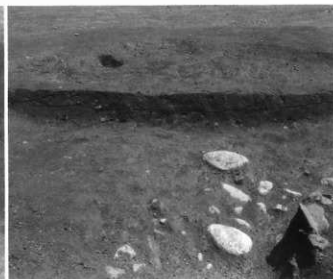
(3) SK-06 出土遺物状況



(4) SK-09 土層断面 (北西より)



(5) SK-09 (東より)



(6) SK-10 土層断面

PL 5 (袴田遺跡)



(1) 袴田遺跡 全景 (北より)



(2) SB-01・02 (北東より)



(3) SB-03 (北より)



(4) SB-04 (西より)



(5) SB-05 (東より)



(6) SB-05 出土遺物状況



(1) SB-05 出土遺物状況



(2) SB-05 出土遺物状況



(3) SB-06 (北より)



(4) SB-07・08 (北より)



(5) SB-07 出土遺物状況



(6) SB-08 出土遺物状況

PL 7 (袴田遺跡)



(1) SB-09~12 (東より)



(2) SB-11 (北より)



(3) SB-11 土層断面 (西より)



(4) SB-12 (東より)



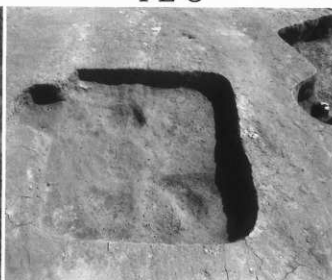
(5) SB-13 (北より)



(6) SB-14 (北より)



(1) SB-14 出土遺物状況



(2) SK-01 (西より)



(3) SK-03 土層断面



(4) SK-06 (東より)



(5) SK-07 (南東より)



(6) SK-07 土層断面 (東より)

PL 9 (袴田遺跡)



(1) SK-07 出土遺物状況



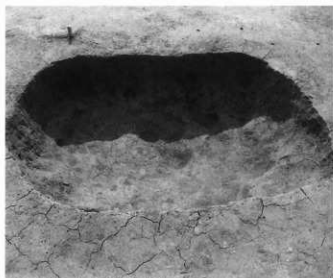
(2) SK-08 (西より)



(3) SK-10 (北より)



(4) SK-10 土層断面 (南より)



(5) SK-11 (北より)



(6) SK-12 (東より)



(1) SK-12 土層断面 (東より)



(2) SK-12 出土遺物状況



(3) SK-14 (東より)



(4) SD-01 土層断面



(5) SD-02 土層断面



(6) SB-17・SX-01 (北より)



SK-06

4



SK-06

5



SK-11

9



SB-02

16



SB-04

22



SB-04

23



SB-04

29



SB-04

30



SB-05

33



SB-05

35



SB-05

40



SB-05

42



SB-05

44



SB-05

46



SB-05

47



SB-05

54



SB-05

55



SB-05

56



SB-05

57



SB-07

61



SB-07

62



SB-07

62



SB-07

63



SB-08

65

PL 13



SB-11

70



SB-12

71



SB-14

74



SB-14

78



SB-14

78



SB-19

81



SB-19

83



SK-07

86



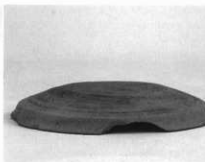
SK-07

86



SK-11

91



SK-12

92



SK-12

92



SK-12

96



SK-12

98



SK-12

99



SK-12

101



SK-13

103



SK-13

104



SD-05

107



SD-07

108



SD-16

109



SD-17

111



SD-17

112

報告書抄錄

ふりがな	やめしなしいせきぐん4						
書名	八女市内遺跡群4						
副書名	福岡県八女市新庄・国武・緒玉所在遺跡の発掘調査報告書						
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第107集						
編著者名	大塚 恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647						
発行年月日	西暦 2015年 3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
	ふくおかけんやめし 福岡県八女市							
井手口遺跡	しんじょうあざいでくち 新庄字井手口	402109	33° 12' 15"	130° 32' 18"	19880711～ 19880908	1,600	国場整備事業	
中里遺跡3地点	くにたけあざなかざと 国武字中里		33° 11' 58"	130° 32' 45"	19890615～ 19890825	2,200		
袴田遺跡	おだまざはかまだ 緒玉字袴田		33° 11' 59"	130° 32' 53"	19890823～ 19891116	1,900		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
井手口遺跡	集落	平安時代	溝状遺構		土師器、須恵器、石製品			
中里遺跡3地点	集落	奈良時代中期	掘立柱建物、溝状遺構		土師器、須恵器			
袴田遺跡	集落	古墳時代前期～ 奈良時代後期	堅穴住居、掘立柱建物、 土壌		土師器、須恵器	SB-07出土の墨書土器		

要約	井手口遺跡は、溝状遺構の集中した状況や1軒のみの堅穴住居の状況から、中心域から離れた集落の縁辺部にあたるものと考えられる。溝状遺構群は水田耕作に供されたものと考えられるが、水田域や中心集落の位置について言及する事は困難である。 中里遺跡3地点は、調査当初溝状遺構と考えられていたSB-01・03・04が道路状遺構である可能性があり、これに伴うものと思われる掘立柱建物群を検出。比較的整然と立ち並ぶ建物群の位置関係から公的施設の存在が想起される。 袴田遺跡は、建物の軸線をほぼ南北にとる掘立柱建物群が存在し、それらを取り囲むように堅穴住居が散在する。中里遺跡3地点同様、整然と立ち並ぶ建物群の配置は公的施設の存在を予感させ、これを補完するように堅穴住居のSB-07からは墨書土器が1点出土している。
----	---

八女市内遺跡群 4

八女市文化財調査報告書 第107集

平成27年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1